

2180-22

90
61

新編
東洋史要

文學士野村浩一
文學士本多辰次郎
共編

中學師範學校教科用書



緒言

本書を編纂せし理由

本書は中等教育を施すべき諸學校に於ける東洋史の教科書に充てむが爲に編纂せり。編者の本書を編纂するに至れるもの、蓋し數個の理由あるを以てなり、左にこれを畧説せむ。

第一 正確なる智識を學生に授けむとするが爲に、最も簡單平易なる教科書を編纂する必要あり。

抑、中等教育に於ては、たとひその分量は少くとも、明瞭正確なる智識を學生に授くるは甚た必要にして、漫りに分量多き雜駁なる智識を注入せむとするは、大に弊害ありといふ

べし。何となれば、若し中等教育に於て、正確なる研究を積まざる習慣を養成するときは、他日或は高尚なる學術を研究せむとし、或は實地に事を執らむとする時に當りて、前日の悪習慣を容易に除去すること能はずして、大なる弊害を生ずればなり。これ本書を編纂するに至れる第一の理由なり。

第二 現今中等教育、特に中學に於ける學生の、漢文の素養甚だ乏しきが故に、最も簡單平易なる東洋史を編纂する必要あり。

試に中學の學生に向ひて、最も困難を感ずるは何れの學科なるかを問はゞ、概ね漢文科を以てその一として答へざること稀なり。これ我が國教育社會の現状の然らしむる必然の結果にして、或は漢字節減を論じ、或は國字改良を説く所

以のものの、皆なこの困難を救濟せむとするに外ならざるなり。而して漢字は東洋史を學ぶに當りて、最も多く補助を與ふるが故に、學生にして若し漢文科の學力甚だ低しとすれば、勢ひ最も簡單平易なる東洋史を撰ばざるべからざるなり。これ本書を編纂するに至れる第二の理由なり。

第三 近世の歴史を稍詳説せむが爲に、最も簡單平易なる教科書を編纂する必要あり。

久しき時代と廣き土地とを包含する東洋史を、僅小なる時間の中に於て、漢文の學力低き學生に、明瞭に教授せむとするは至難の事なり。これを歴史教授の實地に徴するに、上古中古等の部分は稍布演詳説し、從ひて明瞭に教授するを得るも、時間の足らざるが爲に、比較的必要な近世の歴史は

説明簡畧に過ぎて、能く生徒をして了解せしむる暇なきに至ること往々にして然り。甚しきは歐人東漸して以後、現今に至る間の歴史の如きは、趣味多く又必要大なるにも關せず、その概畧をも教授せずして終るものあるに至る。此の如き弊を避け、近世の歴史に重きを置きて、明瞭にこれを説明せむとするには、全體に於て大に分量を少くし、特に上古・中古等の部分は最も簡單に叙し、近世の部分は比較的詳説せざるべからず。これ本書を編纂するに至れる第三の理由なり。

方今東洋史の良著世に出づるもの、その數少しとせず。然れども我が國中等教育の現狀に就きて考ふれば、或は分量多きに過ぎ、或は繁簡宜しきを得ざる憾を免れざるもの少かる所以なり。

本書を編纂せし體裁

一本書は重に文部省の改正教科細目に據り、傍ら諸先輩の説をも參酌して編纂せり。
 一本書每編の終に、東洋史の中心たる支那歴代の沿革興亡略表を圖にて示せり。これ生徒の記憶の便を圖ると同時に、智識を正確明瞭ならしめむがためなり。
 一本書と參照すべき沿革地圖は、別冊として附せり。

明治三十四年二月

編者識す

新編 東洋史要目次

上古史

第一編 太古三代時代

第一章	支那の太古及び三代………	一頁
	太古 夏殷及び西周	
第二章	周の制度………	四
第三章	春秋の世………	七
	春秋列國 五霸	
第四章	戰國の世………	九
	戰國の七雄 秦の一統	
第五章	周末の學術………	一一
	學術の興隆 儒家道家及び諸子百家	
第六章	印度の古史………	一五

太古の印度 佛教の興起 ……

第七章 太古三代時代の概論 …… 一七

支那の太古三代沿革略表

畧年表

國都

中古史

第二編 秦・漢・三國時代

第八章 秦の盛衰 …… 二二

秦の一統 秦の衰亡 楚漢の分争

第九章 西漢の初世 …… 二四

高祖の創業 呂氏の亂 文景の治

第十章 西漢の盛運及び衰亡 …… 二六

武帝宣帝の業 四夷の服屬 王氏の篡

第十一章 東漢の政 …… 二九

漢室の再興 東漢の盛運 漢末の大亂

第十二章 三國の世 …… 三一

三國の分争 三國の滅亡

第十三章 秦・漢・三國の制度・學藝 …… 三三

制度 儒學 文藝

第十四章 東北諸國の盛衰 …… 三四

朝鮮の古史 匈奴鮮卑の盛衰

第十五章 西南諸國の形勢 …… 三七

西域の叛服 印度の形勢及び佛教の傳播

第十六章 秦・漢・三國時代の概論 …… 三八

秦・漢・三國沿革略表

畧年表

國都

第三編 兩晉・南北朝時代

第十七章	兩晉及び五胡	………	四二
	西晉 東晉及び五胡 後魏		
第十八章	南北朝	………	四五
	宋齊梁陳 後魏西魏東魏北齊北周隋の一統		
第十九章	兩晉南北朝の學藝・宗教	………	四八
	儒學 文藝 佛教 道教		
第廿章	東北諸國の盛衰	………	四九
	朝鮮 柔然及び突厥		
第廿一章	兩晉・南北朝時代の概論	………	五一
	兩晉・五胡及び南北朝沿革略表		
	略年表		
	國都		

第四編 隋唐時代

第二十二章	隋の盛衰	………	五六
	文帝煬帝の業 隋末の亂		
第二十三章	唐の初世	………	五八
	唐初の内治外交 武韋の亂		
第二十四章	唐の中世	………	六一
	開元の治 安史の亂		
第二十五章	唐の末世	………	六二
	藩鎮宦官朋黨の禍 唐末の大亂		
第二十六章	唐の制度・學藝・宗教	………	六五
	制度 儒學 文藝 宗教		
第二十七章	東北諸國の盛衰	………	六七
	朝鮮 渤海 突厥 回紇		
第二十八章	西南諸國の盛衰	………	六九
	吐蕃 印度 波斯及び大食		

第二十九章 隋唐時代の概論………七〇

隋唐沿革略表

略年表

國都

第五編 五代・宋時代

第三十章 五代及び宋の初世………七四

五代の興亡 宋の太祖の創業

宋遼の關係 西夏の興起

第三十一章 宋の中世………七七

神宗の新政 哲宗の改復 徽宗の紹述

第三十二章 宋遼・金の關係………七九

遼金の廢興 宋金の交渉

第三十三章 金・宋の滅亡………八一

金の滅亡 南宋の滅亡

第三十四章 宋代の學藝宗教………八三

儒學 文學 宗教

第三十五章 朝鮮及び西域………八五

第三十六章 五代・宋時代の概論………八七

五代・宋沿革略表

略年表

國都

近古史

第六編 元・明時代

第三十七章 蒙古の勃興………九二

蒙古の勃興 太祖の西征

第三十八章 蒙古の侵略………九三

太宗の南略 拔都の西征

憲宗の南征 旭烈兀の西征 …… 九五

第三十九章 元の盛運 …… 九七

世祖の一統 世祖の東南經略 元の極盛 …… 九七

第四十章 元の衰亡 …… 九九

海都汗の反亂 帝位繼承の紛争 財政の紊亂 …… 九九

第四十一章 明の初世 …… 九九

太祖の創業 靖難の役 成祖の遠略 明の極盛 …… 九九

第四十二章 帖木兒の兼併 …… 一〇一

元三汗國の盛衰 帖木兒の雄略 …… 一〇一

第四十三章 明の中世 …… 一〇三

土木の變 俺答の寇 宦官の禍 …… 一〇三

第四十四章 日明・韓の關係 …… 一〇五

倭寇 朝鮮の建國 朝鮮の役 …… 一〇五

第四十五章 交趾の叛服 …… 一〇七

安南 緬甸 暹羅 …… 一〇七

第四十六章 明の末世 …… 一〇九

朋黨の争 明の滅亡 …… 一〇九

第四十七章 元明の學藝・宗教 …… 一一〇

儒學 文藝 宗教 …… 一一〇

第四十八章 歐人の東漸 …… 一二二

印度の形勢 葡西人の東畧 天主教の東流 …… 一二二

第四十九章 元明時代の概論 …… 一二四

元明の沿革略表 …… 一二四

略年表 …… 一二四

國都 …… 一二四

近世史

第七編 清時代

第五十章 清の開國 …… 一二八

滿州の興起 世祖の一統

第五十一章 聖祖の偉業………一二九

三藩の反 臺灣の平定 西北經路

第五十二章 高宗の偉業………一二三

西北經路 西南經路

第五十三章 清の衰運………一二五

仁宗宣宗時代の内亂

第五十四章 蘭英佛諸國の競争………一二六

蘭人の東略 英人の東略 佛人の東略

第五十五章 英領印度………一二九

莫臥兒帝國の末路 英佛の競争

英領印度の確立 緬甸の滅亡

第五十六章 清英の交渉………一三一

鴉片戦争 南京條約

第五十七章 長髮賊の亂及び英佛の侵寇………一三四

長髮賊の亂 英佛の北清進撃 北京條約

第五十八章 露人の東略………一三七

露人の東略 露清の關係

第五十九章 露人の南略………一三九

露人の中亞侵略 清露の交渉

第六十章 英露の衝突………一四一

波斯阿富汗の状況 英露の衝突

第六十一章 安南暹羅及び清佛の交渉………一四四

安南暹羅の盛衰 清佛の交渉 英佛の經路

第六十二章 日清韓の關係………一四八

朝鮮と歐洲諸國 日清韓の關係

第六十三章 日清戦争………一五一

戦争以前 日清の關係 日清戦争

第六十四章 日清戦後の東洋………一五四

戦後の朝鮮 戦後の支那

第六十五章 清の制度學術宗教………一五七

制度 學術 宗教

第六十六章 清時代の概論 ……一六〇

清の沿革略表

略年表

國都

目次畢

新編 東洋史要

上古史

文學士 野村 浩一
文學士 本多辰次郎
共編

第一編 太古三代時代

第一章 支那の太古及び三代

太古 夏・殷及び西周

支那開化の萌芽を發したるものは漢族なり。漢族はもと遷移人種にして、游牧を事とせしが、凡五千年前、黃河の近傍に來り、部衆漸く多く、始めて土着の有様をなせり。

太古

黃帝

黃帝に至り、武力を以て内は漢族を團結せしめ、外は異族を攻伐して四方を經營す。猶我が神武天皇が大舉東征して中原を平定し、無窮の皇基を開き給ひしが如し。實に黃帝は支那建國の始祖といふべし。又この時より、宮室の構造、律呂の調音、文字の製作等、漸次創始せられたり。

堯舜

黃帝より數世を経て、唐堯虞舜出づ。堯は専ら意を民政に用ひ、晩年舜を民間より登用して、天下を譲れり。舜は禹を用ひて洪水を治め、地方を巡狩して益、統一の實を擧ぐ。

夏 巡狩

禹は舜の禪を受けて安邑に都し、國を夏と號す。又四方を經營し、道路を通じ、産業を興す。支那本土の版圖、この時に於て殆ど定まる。禹の子啓位を嗣ぎ、王位世襲の基を開けり。後桀に至り、湯に滅ぼさる。

殷

湯は伊尹を用ひて四隣を攻伐し、夏を滅ぼし、亳に都し、國を商といふ。盤庚に至りて都を殷に遷ししかば、商又殷と號す。紂王に至り、周の武王に滅ぼさる。

周の建國

周の始祖を姬棄といふ。棄の後古公亶父に至りて、岐山の下に邑し、建國の基を開き、國を周といふ。古公の孫昌(王)に至りて、威徳並ひ著はれ、諸侯多くこれに歸す。子發(武)嗣ぎ、遂に東征して殷を破り、代りて王位に即き、鎬(後)長安)に都す。武王崩じて子成王立つ。叔父周公旦政を攝し、經營するところ甚た多く、周一代の制度を定めしも、實にこの時にあり。

周室の衰微

成王の子を康王とす。成康の世は周室極盛の時なるが、この後漸く衰へ、戎狄頻りに邊境を侵す。宣王一時周室の中興を致ししかども、その終りを完うすること能はず。幽王を経て

東周

平王に至り、王室益衰へ、遂に戎狄の患を避けて洛邑(後の洛陽)に遷る(前一年)。平王以後を東周と稱す、この後諸侯相攻伐して寧目なく、王室はたゞ虚器を擁するに過ぎざるなり。

第二章 周の制度

夏殷の時制度の設有りしかとも、全く完備せしは周の時にあり。周の制度は後世歴代の模範とするところなり。今その重なるものを略説せむ。

上に天子の師傅を置き、次に六官を設けて國務を分掌せしむ。天官は庶政を總べ、地官は教化、春官は禮樂、夏官は兵馬、秋官は刑獄、冬官は工藝を掌る。又封建の制を布き、諸侯を公、侯、伯、子、男の五等に分ち、各土地人民を給して、これを統轄せしむ。

官制

田制

夏は民一人に五十畝を給し、五畝の所得を朝廷に納れしむ、これを貢法といふ。殷は六百三十畝を九分し、その八部を八家に分授し、その所得を私有せしめ、中央の一部を公田とし、八家力を合せて公田を助耕せしむ、これを助法といふ。周は都に近きところに貢法を用ひ、遠きところに助法を用ひ、家毎に百畝を給せり、これを徹法といふ。

夏ノ貢法

	五十畝

殷ノ助法

		七十畝
	公田	

周ノ徹ノ法

	百畝

		百畝
	公田	

兵制 周の兵制は兵農一に出でたり。男子二十歳より六十歳まで、兵役に服せしむ。軍隊は五百人を旅とし、五旅を師とし、五師を軍とす。天子は六軍を有し、諸國は各、等差あり。三代皆學校の設あり。周の大學を辟雍ヘキウといひ、小學を序庠シウシヤウといふ。大學の教科は禮・樂・詩・書の類にして、小學の教科は日常應對の儀式等なりとす。

學制

第三章 春秋の世

春秋列國 五霸

春秋列國 周の東遷以後、凡三百二十年間を春秋の世といひ、春秋の後凡百八十三年間を戰國の世といふ。周室漸く衰ふるに及びて、諸侯互に攻伐を事とし、春秋に至りては、強國は漸次弱國を併せ、以て割據の勢をなせり。而して諸侯の大なるものを魯・衛・晉・鄭・燕(以上周同姓)・齊・宋・楚・秦・越(以上周異姓)等となす。當時列侯分争の間に在りて、よく諸侯の長となりしものを覇者といふ。覇者興起の原因を概括略叙すれば、左の二に歸するを得べし。

覇者興起の原因

(一) 尊王 内、王室の勢力衰微して諸侯を統ふるを得ず、故に

有力の諸侯出でて王室を輔け、統一の業をなさむとしたること。

(二)攘夷 外、戎狄の侵掠甚しく、爲に有力の諸侯他の群侯を率ゐて、これを防禦せむとしたること。

春秋の五霸
最初に覇者となりしは齊の桓公なり。桓公は管仲を用ひて富強の策を講し、内は周室を衛り、外は戎狄を防ぐ。當時漢族が異族侵亂の患を免れしは、實に桓公・管仲の力によれり。宋の襄公はこれに繼ぎて覇業を圖り、楚と戦ひて直に敗らる。晉の文公は襄公に繼ぎて起り、周室を救ひ、楚を破り、その覇業の盛なること、齊の桓公と前後相比せり。秦の穆公は西方に雄視し、楚の莊王は南方を占領して、共に晉に抗せり。以上を春秋の五霸といふ。五霸の後、吳・越一時覇を稱せり。

第四章 戦國の世

戦國の七雄 秦の一統

戦國の七雄

覇者の事業の結果は、小國益、大國に併吞せられ、陪臣強盛にしてその主を凌ぐに至り、終に戦國の世となる。晉は韓・魏・趙三氏に分割せられ、齊は田氏に篡はる。こゝに於て山東に趙・魏・韓・燕・齊・楚あり、山西に秦ありて、攻伐止む時なし、これを戦國の七雄といふ。

趙・魏・韓は中央の要地を領有して兵強く、燕は北方に僻在して勢弱く、齊は富強と稱すれども、自ら進みて中原を略取するの勇なし。たゞ楚は南方一帯の地を有し、國大に兵衆し、秦は西方高峻の地に據り、國富み兵強く、孝公以後常に六國を壓するの勢あり。こゝに於て合従・連衡の説起るに至れり。

合従連衡

抑、秦の利は諸侯を孤立せしむるにあり、諸侯の利は共同聯合するにあり。地形よりこれをいへば、南北は従即ち縦なり、故に山東の六國相同盟するを合従といふ。東西は衡即ち横なり、故に山東の六國秦に連和するを連衡といふ。蘇秦は合従の説を首唱して、一時六國の相印を佩びしかども、幾ばくならずして、秦は齊魏を欺きて趙を伐たしめ、合従直に破る。次いで張儀出でて、秦の爲に連衡の策を立て、まづ楚を欺き、齊に絶ちて秦と和せしめ、遂に六國をして秦に服事せしむ。後六國或は合従し、或は連衡したりしが、漸次萎靡振はず、遂に秦に滅ぼさる。

秦の強大

秦は穆公以來、賢士を擧げて常に富強を圖れり。就中孝公は商鞅を用ひて改革を行ひ、國運隆盛となる。嬴政に至り攻伐を事

とし、遂に周を滅ぼし(四年)六國を併吞す(四年)秦の列國を統一せし所以は、一は地勢の險要と人民の強勇とに因り、一は歴世一定の國是を確守繼續して已まざりしとに因る。又六國の滅亡したる所以は、一はその境土相接して四方の警備應酬に忙しく、秦の如く利なれば關を開きて進取し、不利なれば關を閉ちて固守するの便を有する能はざりしと、一は歴世一定の國是方針を斷行する能はざりしとに因る。

第五章 周末の學術

學術の興隆 儒家・道家及び諸子百家

學術興隆の原因

支那古今を通して學術の隆盛なるは、戰國時代を最とす。その然る所以のもの、或は人種の競争學者の優待等、與りて力ありしかども、主なる原因は左の二にありといふべし。

(一)教育の素養 周の時に制度完備し、文化興隆し、政府の官人その職を世襲して、學術・實務を研究せしもの、春秋・戰國に至りて、漸次その地位を失ひ、民間に下りて各、專攻の學術・技藝を縦横に發揮せしこと。

(二)言論の自由 戰國の際に門閥社會破壊せられて、上に政府の束縛なく、下に社會の制裁なきにより、人々自由にその意見を吐露し、持説を主張したりしこと。

孔子は春秋の末に出で、前代諸聖人の施設せしところを審察し、儒教を大成せり。その説くところ、修身・齊家より推して一國の政治に及ぶ。要するに孔子の道は實踐・躬行を尙び、世用を講じ、性情を養ひ、習俗を和らけ、支那數千年政治・教學の基礎となる。後世孔子の學を奉ずるものを儒家といふ。孔子

孔子

老子



孔子

老子

の孫に子思あり、續いて孟子・荀子出で、儒家を擴張せり。

孔子と時を同じうして老子出づ。その説虚無・自然を主とし、人をして私心を去りて公平に歸せしめ、以て治安を圖るにあり。後世その學を奉ずるものを道家といふ。列子・莊子等老子の學を奉せり。

老子



老子

當時儒・道二家の外、更に諸子百家を輩出せり。墨子は兼愛を説きて墨家の祖となり、楊子は自愛を説きて楊家の祖となる。この他法家に管子、申子、商子、韓非子等あり、兵家に孫子、吳子あり、而して屈原辭賦を以てその間に著る。

第六章 印度の古史

太古の印度 佛教興起

太古の印度

漢族の支那文化の萌芽を發したると相前後して、アリヤ入種は印度文明の基を開けり。今より凡四千年前、アラル海邊に住せる「アリヤ」入種の一部印度に南下し、漸次土民を征服して、千餘年の後、殆ど全半島を占領せり。

巡狩

當時「アリヤ」人は波羅門教を奉し、印度國民は「アリヤ」人なる波羅門(僧族)刹帝利(王族)吠舍(平民)と、土民なる首陀羅(賤民)との四階級に分る。而して僧族獨り宗教・學術の實權を握り、專横を極め、教法は腐敗し、社會は沈滯する狀況となれり。

この時に當り、釋迦牟尼出でて、佛教を開き、一大革新を行へり。釋迦はその名を悉達、喬答摩といひ、孔子と殆ど同時に

釋迦

釋迦國



で、波羅門に反對し、平等主義の法を説きて、門閥の尊ぶべからざるを論破す。ここに於て印度の人民争ひて佛教に歸依す。
釋迦入寂の後凡百五十年を経て、アレクサンダー歴山大王印度に侵入し、印度川附近を平定せしが、幾ばくもなぐして病死す。尋いてその部將、セリユーカー、復

阿輸迦王

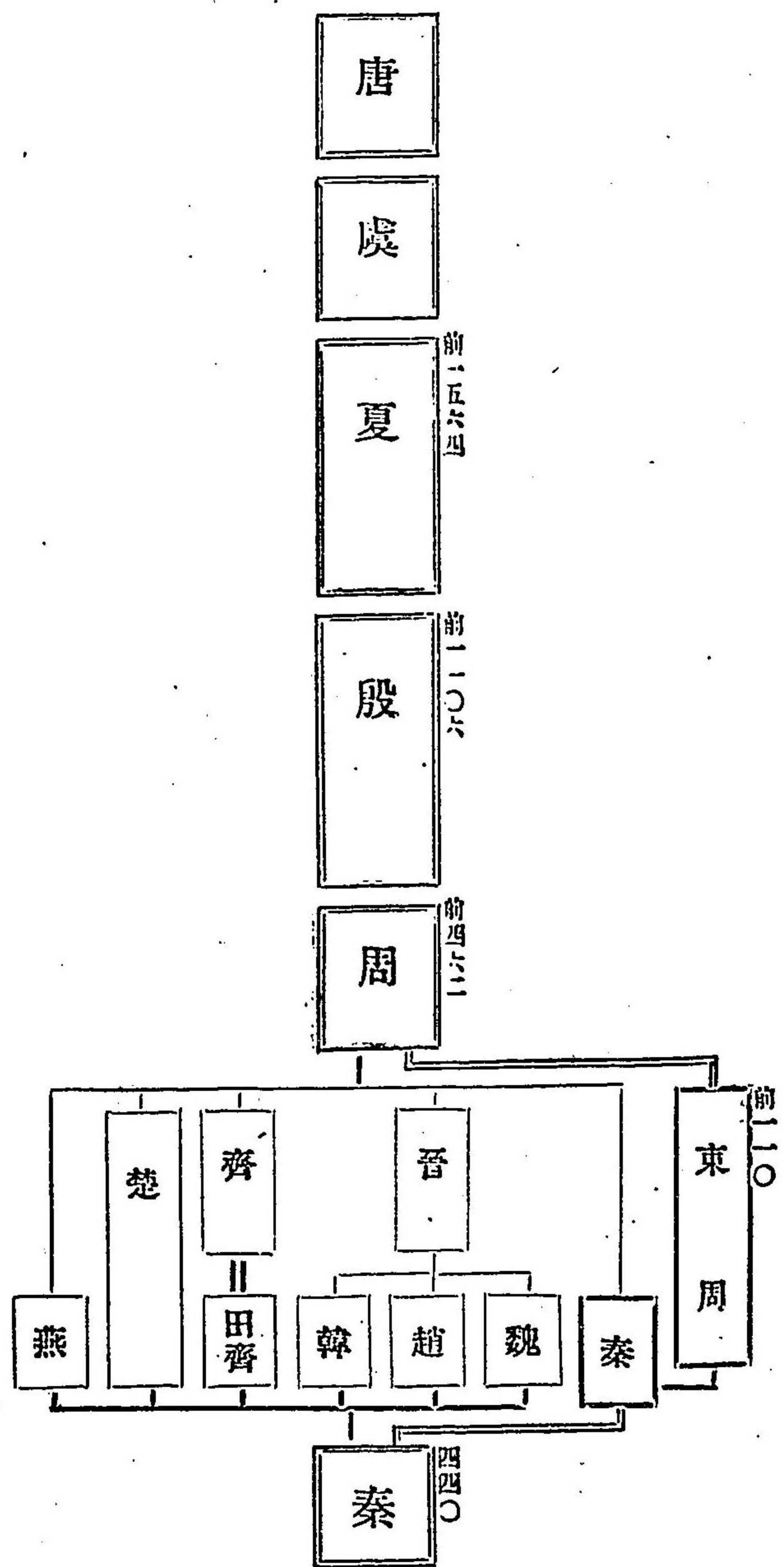
印度を征服せむとす。時にチンギス旃陀羅笈多といふもの出でて、歴山大王の侵入により、印度の亂れたるに乗じ、毛利耶朝を立て、セリユーカーの侵入を防ぎ、大に國威を張る。その孫阿輸迦王深く佛法を信じ、これが擴張を圖りしかば、西は波斯地方より、南は獅子國(今の錫蘭)に傳播するに至れり。時實に支那戰國の末に相當せり。

第七章 太古・三代時代の概論

支那太古の状況はこれを詳にし難し、黄帝建國の基を開きて、漢族の領域河江の間に及び、堯舜に至りて社會の秩序整頓し、三代文化の基を建つ、これより後史蹟漸く明らかなり。夏殷を経て周に至り、文化著しく進み、帝業大に成りしかど

も、その中世以後は群雄並び起りて、戦亂相續ぐ。而して春秋の間は諸侯割據して相争ひしが、周の制度・文物をほまた混びず、内は陰險測られざるも、外は禮讓を尙ぶ風あり。戦國に至りては、討滅日に繼ぎ、詐力・權謀公行して少しも憚らざる有様となれり。秦遂に戦亂を平定して支那本部を一統せり。支那の文明大に發達したると同時に、印度の文明もまた著しく進歩したりしかども、上古期に於ては兩者各、獨立の發達をなして、皇紀八世紀の初めに漢族大に勢力を増し、その版圖を擴張し、中央亞細亞及び印度と交通を開くに至るまで、何等の關係をも有せざりき。

支那の太古三代沿革略表



略年表

夏—凡四五八年間前一五六四—前一〇六
 殷—凡六四四年間前一〇六一—前四六二
 周—凡八七四年間前四六二—四一二

符	號
☐	—
☐	
☐	
☐	—
☐	—
☐	—

每編皆コノ例ニ同ヲ

ハ一統ノ朝ヲ示ス

ハ偏安ノ朝及ビ割據ノ大國ヲ示ス

ハ割據ノ小國ヲ示ス

ハ繼統・改號ヲ示ス

ハ禪讓・篡奪ヲ示ス

ハ分裂・離叛ヲ示ス

ハ克勝・兼併ヲ示ス

周ノ東遷—皇紀前一〇〇年
 周ノ滅亡—皇紀四〇五年
 東周ノ滅亡—皇紀四一二年(孝靈天皇四二年)
 秦ノ一統六國ノ滅亡—皇紀四四〇年(孝靈天皇七〇年)

國都

夏—安邑(山西省解州夏縣)

殷—亳(河南省歸德府商邱縣)・殷(河南省河南府偃師縣)

周—鎬(陝西省西安府)

東周—洛邑(河南省河南府)

中古史

第二編 秦・漢・三國時代

第八章 秦の盛衰

秦の一統 秦の衰亡 楚漢の分争

始皇の内
治外征

嬴政天下を一統して自ら始皇帝と稱し、内政を改革し、外夷を征服す。政府の權力強盛を極めて、君主獨裁の制を固定せしは爰に始まる。

始皇李斯の言を用ひ、封建を廢して郡縣の制を確立し、民間の兵器を沒收し、富豪を國都咸陽に集め、以て禍亂を豫防す。始皇又蒙恬をして、兵三十萬を率ゐて、北方匈奴を征せしめ、舊來の長城を増築連接して、その防禦に備ふ、萬里の長城と

秦の衰亡

れなり。又南越を征して郡を置き、謫民五十萬をして南嶺を戍らしむ。

始皇外多く守兵を遣し、内盛に宮殿を造營し、人民を苦役し、又挾書の禁を令し、民間の書を焚き、學者を坑殺す、故にその崩後四方漸く亂を念ふに至る。加ふるに二世皇帝、宦者趙高を任用して政を失す、ここに於て豪傑蜂起し、天下大に亂る。陳勝・吳廣は斬に起り、項羽は楚の懷王を奉して吳に起り、劉邦は沛に起る。

楚漢の分争

項羽は黄河に沿ひて河北の地を定め、劉邦は漢水に沿ひて直に咸陽に逼る。時に二世皇帝は趙高に弒せられ、公子嬰位に在りしが、出でて降り、秦遂に亡ぶ(四五)。

尋いで項羽も亦關中に入る、初めまづ關中に入るものは、そ

の地に王たるべきを約せしに、項羽その約を履まらずして、劉邦を漢中・巴蜀に封じ、懷王を弑して自ら西楚の霸王と稱す。劉邦は蕭何・韓信・張良等の名臣を用ひて項羽に當る。楚漢分争すること四年に亘りしが垓下の一戦にて項羽全く敗れ、烏江に走りて自殺す。こゝに於て劉邦帝位に即く(四年)、これを漢の高祖とす。

第九章 西漢の初世

高祖の創業 呂氏の亂 文景の治

郡國の制

高祖即位の後、都を長安に奠め、前代の興亡に鑑み、郡國の制を定め、郡は朝廷の直轄にして守を置き、國には同姓・異姓の諸侯を封す。後異姓の諸侯王は殆ど皆誅せられ、同姓の諸侯益強大となれり。

呂氏の變

同姓の諸侯強大となりて、一方に於ては漢室孤立の患を防ぐに利ありしかども、一方に於ては禍亂を招くの害ありき。彼の呂氏の變、七國の亂の如きは、その利害を示す適例なり。高祖崩じて惠帝嗣ぐ。時に高祖の皇后呂氏政を執り、諸呂を立てて王となす。呂后崩するに及び、諸呂亂をなさむとす。大臣諸王内外相應じて、諸呂を除き、文帝を迎へ立つ(四年)

文帝の治

文帝勤儉にして治を勵み、國家大に富みたれども、諸侯漸く専横にして朝命を奉せざるものあるに至る。時に賈誼諸侯の弊を痛論せしかば、文帝諸侯を弱うせむことを策れり。景帝即位し、鼂錯の勧めに従ひ、頻りに諸侯の地を削る。こゝに於て吳・楚等七國連合して漢室に叛きしが、直に周亞夫に平定せらる(五年)

七國の亂

この亂の後景帝は諸侯王を國に就かしめず、別に朝廷より官吏を封國に遣し、政を執らしめ、又諸侯の地を分ちしかば、諸侯の勢力頓に減じ、政權統一の實を擧ぐることを得たり。

第十章 西漢の盛運及び衰亡

武帝宣帝の業 四夷の服屬 王氏の篡

武帝の業

孝景帝崩じて孝武帝立つ。漢は高祖以來數世の富を積み、武帝に至りて財政の豊富を致せり。武帝英邁の資を以て、財力充實の際に臨み、内文運を隆ならしめ、外四隣を攻伐して、大に國威を輝かせり。

文學

武帝諸子百家の説を斥け、専ら儒學を崇信して、大學を設け、五經博士を置く(五年)。これより儒學は政教の標準となり、學者又輩出せり。

外征

武帝の最も力を盡したるは外國經略にあり。前には衛青霍去病(去病)、後には李廣利を遣し、匈奴を征し、又朝鮮南越(南越)、閩越(閩越)を平けて郡を置き、張騫(張騫)を使として始めて西域に交通せり(第十五章及び第十六章参照)。

宣帝の中興

武帝外征を事として國家大に疲弊せしが、昭帝の時霍光政を輔け、民力の休養を圖り、次いで宣帝立ち、頗る賢明にして治に勵みしかば、國家泰平なりき。宣帝特に意を地方政治に用ひ、賢相良吏輩出し、又匈奴及び西域に對して、大に勢威を張れり。實に西漢中興の主と稱すべし。

宦官と外戚

宣帝に次いで元帝立つ。宦官弘恭・石顯事を用ひて朝政を亂す。これより宦官の權盛なり。元帝に次いで成帝立つ。母后王氏、成帝以後三代の間、太后と稱せられて政に與り、又成帝の

時、王太后の弟王鳳大司馬大將軍となりてより、王氏の一族その職を継ぎ、内外相應じて事を執る。こゝに於て宦官外戚相軋轢したりしが、哀帝の時、外戚王莽巧に人心を収め、遂に漢室を奪はむとす。哀帝の次に平帝立つ、王莽遂に帝を弑し、孺子嬰を立て、又これを廢し、自立して皇帝の位に登り、國號を新と改む(六六、六八年)。

王莽即位の後、急激に諸制度を改革し、天下の利益を吸収せしかば、人民爲に業を失ひ、天下怨望し、幾ばくもなくして義兵四方に起る。漢の王族劉秀兵を舂陵(シウロウ)に擧げ、勢甚た盛なり。秀遂に長安に迫り、王莽を殺し、皇帝の位に即きて、漢室を再興す(六八、五年)。これを東漢の光武皇帝とす。

第十一章 東漢の政

漢室の再興 東漢の盛運 漢末の大亂

漢室の再興

光武帝即位の後、都を洛陽(河南省河南府)に遷し、四方を平定し、前代に鑑みて政を親らし、功臣をしてその終りを全うせしむ。帝又文教の隆興を圖りしかば、この後學術盛になり、清節の士も多く出でたり。光武帝の後、明帝・章帝相繼ぎて立ち、内治・外交その宜しさに適ひ、國威を發揚せり。

東漢の盛運

外政

明帝耿秉(カウヘイ)竇固(ソウコ)等をして北匈奴を伐たしめ、班超(ハンショウ)をして西域諸國を内附せしむ。蔡愔(サイケン)大月氏に使して、二僧及び佛經・佛像を得て歸りしは帝の時なり(七二、七年)。章帝の時西域背き、北匈奴も來寇せしが、班超再びこれを討平す。和帝の時竇憲(ソウケン)北匈奴を伐ち、班超西域を治めて威令大に行はる。班超の死後、西域

漸次離叛せり。然れども一時漢の威令西域に行はれたる結果として、桓帝の時大秦國(羅馬帝國)と海路相通じ(二八六)、爾後三國の時に至るまで貿易止まざりき(第十五章及第十六章参照)。

外戚と宦官

章帝の子和帝幼にして位を嗣ぎ、竇太后政を執るに及びて、外戚竇憲等漸く専横なり。尋いで帝宦官鄭衆と謀り、竇憲を斃してより、宦官の權亦甚た重し。以後幼主相繼ぎ、外戚宦官或は結托し、或は抗爭して政を紊したりしが、桓帝靈帝の間に至りて、宦官全く勢力を握れり。當時節義を尙ふ志士、宦官の専横を憤慨して、これに反抗す。宦官は志士を憎み、黨人と稱して前後數百人を禁錮し、尋いでこれを殺す。こゝに於て黃巾の賊を始めとして、盜賊四方に起れり。

黨人の禍

靈帝の子辨立つ、袁紹洛陽に入りて、悉く宦官を誅す。董卓袁

紹に反對して辨を廢し、獻帝を立て、長安に遷る。已にして董卓その部下に殺され、獻帝洛陽に還る。これより群雄四方に割據して、天下大に亂る。

群雄割據

曹操は山東に據りしが、獻帝の洛陽に歸るに及びて、これを許(河南省開封府)に迎へ、勢最も強く、四方を征して悉く江北の地を平定し、大舉南下せり。時に吳に孫權あり、劉備と共に大に曹操の軍を赤壁の下に破る。

第十二章 三國の世

三國の分争 三國の滅亡

三國分争

赤壁の戦の後、曹操は江北に退き、孫權は江南の地を有し、劉備は巴蜀漢中を平定し、天下三分の勢をなせり。劉備部將關羽をして曹操に迫らしむ。曹操大に懼れ、孫權と結びて關羽

を攻む、吳の軍遂に關羽を殺す。

時に曹操死し、子丕洛陽に即位し、魏の文帝といふ。東漢爰に亡ぶ(八八年)翌年劉備成都に即位して、蜀漢の昭烈帝といふ。後孫權建業に即位して、吳の太帝といふ(八九年)。

蜀の昭烈帝關羽の仇を報いむと欲し、吳を伐ちて敗れ死す。謀臣諸葛亮遺命を奉じ、後皇帝を輔け、外は吳と和し、内は政を修め、屢魏と争ふ。亮魏の名將司馬懿と相對峙して、能く兵を用ひしかども、志を得ずして病死す。蜀これより衰ふ。

三國滅亡

魏にては、司馬懿軍功を恃みて政を專にし、その二子師及び昭、君主を廢立し、益權を弄す。昭蜀の衰へたるに乗じて兵を遣し、後皇帝を降し、これを滅ぼす(九二年)。

昭の子炎に至り、遂にその主元帝を廢し、魏の位を篡ふ(九二年)。

これを西晉の武帝とす。當時吳は江南に據りしが、遂に西晉に滅ぼさる(九四年)。三國分立して天下を争ふこと六十年にして、西晉これを一統せり。

第十三章 秦・漢・三國の制度・學藝

制度 儒學 文藝

制度

秦の制度は前代の繁文を除き、専ら實用を主となせり。中央政府には丞相、太尉、御史大夫の三官を置く。丞相は庶政を總べ、太尉は軍務を掌り、御史大夫は監察を掌る。漢は全く秦の制度を襲用せり。秦は封建制度を廢して郡縣制度を行ふ。漢は封建郡縣を併用して郡國の制を採れるが、後朝廷實權を握りて、封建は有名無實となれり。三國に至りて制度全く壞る。

儒學

秦學者を坑にし、書籍を焼きてより、學藝大に衰ふ。西漢の武帝専ら儒學を獎勵し、董仲舒、孔安國、楊雄等の大儒出づ。東漢の光武帝又大に學藝を興し、爾來學者書生の出づること甚た多し。鄭玄古書に註釋をなし、その說大に行はれしが、魏の王肅鄭玄の說に反對せり。

文藝

西漢の賈誼、司馬相如、司馬遷、東漢の班固は、共に文章を以て名あり。中に於て司馬相如は詞賦に長じ、司馬遷、班固は歴史に長ず。東漢の末に至りては、經義の研究その極に達し、詞賦文章の學亦盛なり。

第十四章 東北諸國の盛衰

朝鮮の古史 匈奴・鮮卑の盛衰

古朝鮮

周の初め箕子封せられて古朝鮮(大同江遼河間の地)の王となり、後四

三韓高句麗新羅百濟

十世を経て箕準の時、燕人衛滿秦漢の亂を避けて遼東に來り、準を逐ひ、代りて王となる(四六年)。その孫右渠に至り、西漢の武帝に滅ぼさる(三五年)。

當時朝鮮南部の地は、馬韓、辨韓、辰韓の三部に分れしが、箕準衛滿に逐はれ、馬韓に來りて王となり、他の二韓を統治す。西漢の末、朴赫居正、辰韓の地に起りて新羅國を建て(四六年)。扶餘の朱蒙、滿州より南下して、古朝鮮の地に高句麗國を建て(四六年)。朱蒙の子温詐馬韓に入り、百濟國を建て(三六年)。

高句麗は屢、支那の兵を蒙りしが、東漢の光武帝の時好を通じ、後又叛くに至れり。新羅は東漢の末に、我が神功皇后の征伐に逢ひ、以後百濟・高句麗と共に、我が國に朝貢せり。

匈奴の盛衰

匈奴は戰國以來屢、中國を侵し、一時秦の始皇帝に征服せら

れしかども(第八章参照)秦の亂るゝに及びて又入寇す。冒頓モウトン單于センに至り強大となり、頻りに漢の北邊を侵す。高祖以來和親を旨としたりしが、武帝力を盡してこれを伐つ。これより漢の北邊漸く事無きを得たり。

東漢の初め、匈奴内亂の爲に南北二部に分れ、南匈奴は漢に内附し、北匈奴も亦漢の討伐を蒙りて大に衰へ、鮮卑・烏桓漸次匈奴の地を占領するに至れり。

鮮卑・烏桓共に東胡の後にして、秦漢以來匈奴に服従せり。東漢の初め、北匈奴の衰ふるに及びて、漸次強大となりしが、烏桓は遂に曹操に滅ぼさる(七八年)。鮮卑は以後益勢を張り、晋の時に至りて、大に中國に侵入せり(第十七章参照)。

鮮卑・烏桓の興亡

第十五章 西南諸國の形勢

西域の叛服 印度の形勢及び佛教の傳播

西域の叛服
西漢の初め、月氏匈奴に逐はれて今の伊犁地方に走り、又烏孫に逐はれて媯水(阿母河)の邊に至り、大夏國を滅ぼし、大月氏國を建つ。武帝月氏と同盟して匈奴を夾撃せむとし、張騫を大月氏國に使せしむ。當時西域の地(今の中央亞細亞)は、概ね匈奴に屬せしかば、張騫途に匈奴に囚はれ、止まること十餘年、遂に逃れて大月氏國に達せり。張騫は月氏との同盟に就きては成功せざりしが、更に西域に使うること二回、安息(今波斯)に(今印度)を通じ、東西交通の端緒を開けり(第十、十一章参照)。

西域は王莽の時に至りて漢に背きしが、東漢の初め班超の力により、再び漢に通せり(第十一章参照)。然れども班超の死後は、復

印度の形勢
及び佛教の
傳播

背くに至れり。

印度は阿輸迦王の死後、毛利耶朝亡び、西漢の初めに至り、北西兩印度は大月氏に侵略せられ、佛教は大月氏に移る。迦賦色迦王大月氏に王たるに及びて(七年)深く佛教を信じ、布教に盡力せしかば、佛教は盛に西域に行はれ、東漢の明帝の時支那に入り(章第十一)東漢の末には支那全土に傳播し、三國を経て晋に至り、益隆盛に赴けり。

第十六章 秦漢三國時代の概論

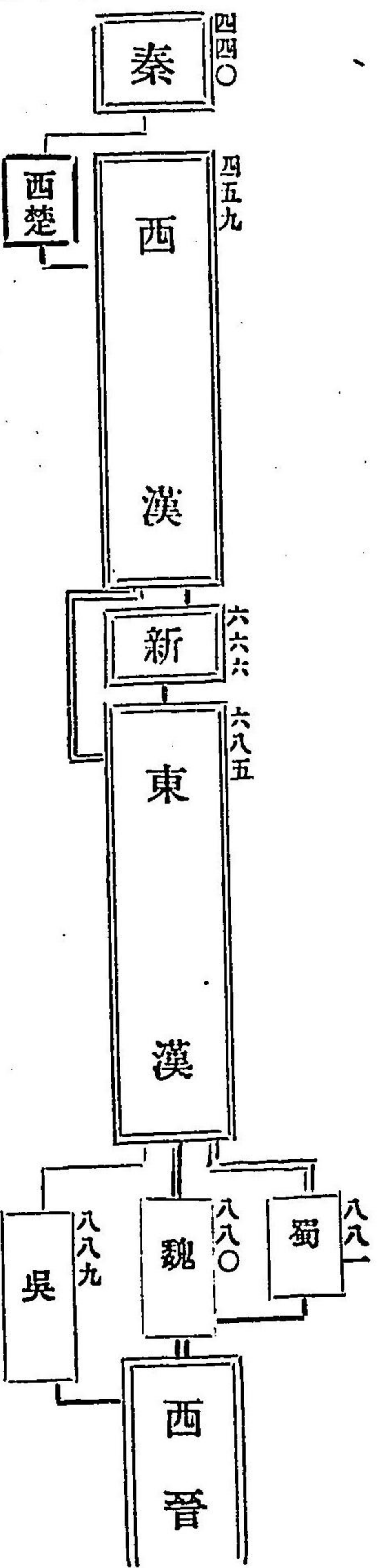
秦天下を一統して國威を振張せしかども、その施設するところ遠大急激に過ぎ、人民の怨を招きて直に亡ぶ。西漢秦の後を享け、文武兩道を兼ね、内治外交皆その宜しきを得、漢族

の勢力益増進して、外夷を征服せり。歷朝の君主皆順良にして、一人の暴君を出さざるごとく、西漢の如きは、支那歷代中前後その比を見ざるなり。

西漢外戚に滅ぼされしも、漢室直に再興し、國運復前日の隆盛を致せり。東漢の末宦官專横を極め、人民大に苦むに至りて、漢室遂に亡びて天下分裂す。三國は互に攻伐を事としたりしかど、なほ漢族以外の人種、支那本部を擾亂するに至らざりき。

要するに秦漢三國時代には、漢族の勢力大に膨脹して、始めて中央亞細亞及び印度と交通を開き、東西文明の關係を生ずるに至れり。

秦·漢·三國沿革略表



略年表

秦——一五年間(四四〇—四五五)
 西漢——二〇六年間(四五九—六六五)
 新——一七年間(六六六—六八三)
 東漢——一九五年間(六八五—八八〇)
 三國——六〇年間(八八〇—九四〇)
 魏——四五年間(八八〇—九二五)

蜀——四二年間(八八一—九二三)
 吳——五一年間(八八九—九四〇)
 秦ノ一統——四四〇年(孝靈天皇七〇年)
 西漢ノ一統——四五九年(孝元天皇一三年)
 王莽ノ篡立——六六六年(垂仁天皇三五年)
 東漢ノ再興——六八五年(垂仁天皇五四年)
 東漢ノ滅亡——八八〇年(應神天皇二〇年)
 西晉ノ一統——九四〇年(應神天皇八〇年)

國・都

秦——咸陽(陝西省西安府咸陽縣)
 西漢——長安(陝西省西安府)
 東漢・魏——洛陽(河南省河南府)
 蜀——成都(四川省成都府)
 吳——建業(江蘇省江寧府)

第三編 兩晉南北朝時代

第十七章 兩晉及び五胡

西晉 東晉及び五胡 後魏

西晉の政五胡の侵入

西晉の武帝即位の後、大に宗族を封じ、晉の藩屏となししが、惠帝嗣ぎ、賈皇后政を專にするに及び、諸王交起りて政權を争ふ、これを八王の亂といふ。この亂十八年に亘りしかば、國力大に疲弊し、夷狄の侵入を招くに至れり。東漢の末より夷狄漸く塞内に來り住し、中にも匈奴、鮮卑、羯、氏、羌最も強大なり。八王の亂起るに及びて、劉淵山西に據りて國を漢と稱し、李雄蜀に據りて國を成(後に漢と改む)と稱す。淵の子聰に至り、懷帝を殺し、愍帝を降し、西晉を滅ぼす(九年)。

東晉の再興

に於て司馬懿の曾孫睿、建業に即位す(七年)、これを東晉の元帝とす。

淝水戦前の江北

漢は聰の死後、前趙(石)、後趙(勒)に分れしが、後趙遂に前趙を滅ぼして江北を一統す。幾はくもなく、後趙分裂して魏、前秦、前涼、並び起り、前燕、東北より來りて、魏を滅ぼす。前秦は符堅の時に至り、前燕を滅ぼし、前涼を併せ、殆ど江北を一統せり。

淝水戦前の江南

東晉は元帝の後、内亂相續ぎ、國勢常に振はざりしが、穆帝に至り、桓温軍を統べて雄略あり、西征して成を滅ぼし、更に北伐して敗走す。その死後、謝安代りて政を執り、江南一帶の地を保つを得たり。

淝水の戦

前秦の符堅、國力の強盛を恃み、大軍を發して東晉を侵し、謝玄と淝水に戦ひ(三年)、大敗して部下に殺さる。これより江

淝水戦後の江北

北忽ち瓦解して、後燕・西燕・後秦・西秦・後魏・後涼・北凉相次いで起り、中には後魏の拓跋珪最も強し、後燕の西燕を滅ぼしし時、珪は後燕を破りて帝位に即く(八〇五)これを道武帝とす。かくて後燕は南燕・北燕に分れ、夏又起る。

淝水戦後の江南

東晉は淝水の戦以後、内亂絶えず、安帝の時劉裕内亂を定めて實權を握り、進みて南燕・後秦を滅ぼし、安帝を弑して恭帝を立て、尋いで篡立す(九〇七)これを宋の武帝とす。

後魏の一統

江北にては、南凉は西秦に滅ぼされ、西秦は夏に滅ぼされ、西凉は北凉に滅ぼさる。後魏は道武帝の孫太武帝位に即き、夏及び北燕を滅ぼし、尋いで北凉を滅ぼす(九〇九)こよに於て江北一帯後魏の有に歸し、支那本部は南北二大國に分る。

五胡十六國表

漢族	五胡				十六國
	羌	氐	鮮卑	匈奴	
前凉・西凉・北燕	後秦	成(漢)・前秦・後凉	前燕・後燕・西秦・南燕・南凉	漢(前趙)・北凉・夏	

兩晉五胡の興亡につきては、第二十一章沿革略表を参照すべし。魏と西燕とは年祚短く、十六國の中に算入せず。

第十八章 南北朝

宋・齊・梁・陳 後魏・西魏・東魏・北齊・北周 隋の一統

宋 齊 梁

宋は武帝に次いで文帝立つ。文帝後魏と戦ひて連敗せしより、國運漸く衰へ、權臣蕭道成位を篡ひて齊と號す(九一三)齊は内亂相繼ぎて國政大に亂れ、蕭衍遂に帝位を篡ふ(二一六)これを梁の武帝とす。

後魏

後魏の太武帝江北を一統して後、柔然(第二章二十一)を伐ちて内、外蒙古を平定し、國威大に張る。太武帝の孫孝文帝に至り、舊都平城を洛陽に遷し、自國(鮮卑)の風を改めて漢の風に化せしめむことを勉めしかば、これより柔弱の風漸く行はれ、國運衰へ初めたり。

孝文帝の孫孝明帝立ちて、國政大に亂る。高歡これを鎮定して孝武帝を擁立す、武帝高歡が功を恃みて權を弄するを怒り、これを誅せんとしたれども能はず、遂に長安に出奔して宇文泰に依る。高歡は別に孝靜帝を洛陽に擁立す。これより後魏は西魏・東魏に分る(五年一九)。後東魏は高歡の子洋、篡立して國を齊(北齊)と號す(〇年二二)。西魏も宇文泰の子覺、篡立して國を周(北周)と號す(七年二二)。

西魏東魏

北齊

北周

後梁
陳

兩魏紛争の間、南朝事無きこと四十餘年、時に東魏の侯景來りて梁の武帝に降りしが、後叛きて建業を攻め、帝を幽殺して自立す。これより諸王相争ひ、梁大に亂る。北齊・西魏來りて梁を攻む。武帝の孫蕭譽(サ)、西魏に援けられて帝と稱す(五年二二)。これを後梁の宣帝とす。時に陳霸先梁の内亂を定めて侯景を誅し、敬帝を立てしが、尋いで篡立す(七年二二)。これを陳の武帝とす。こゝに於て天下分れて、北齊・北周(北朝)・後梁・陳(南朝)の四となれり。

隋の一統

北周の武帝北齊を滅ぼして北朝を一統せしが、孫靜帝の時に至り、外戚楊堅國を篡ふ(一年二四)。これを隋の文帝とす。尋いで文帝後梁を滅ぼし、又陳を併す(九年二四)。東晉以來二百七十二年、南北對立以來百五十年にして、天下始めて一に歸す。

第十九章 兩晉・南北朝の學藝・宗教

儒學 文藝 佛教 道教

儒學

南北の學術自ら差異あり、經學は北朝を推し、文藝は南朝を主とす。經義にありては、北朝は古義を尙びて鄭玄の説を奉じ、南朝は新説に傾きて王肅の説を奉ず。

文藝

當時文章は所謂六朝（吳晉及び宋齊梁陳）華麗の體に流れ、古文の風を失へり。西晉の陸機、左思、宋の范曄、梁の沈約等は文章を以て著はれ、東晉の陶潛（淵明）は詩賦を以て名あり。梁の武帝父子は最も博學能文と稱せらる。

佛教

佛教は東漢の末より漸次隆盛となり、支那印度の僧相往來して、布教に盡力す。東晉の末に法顯（法顯）あり、後魏の末に宋雲あり、梁の武帝の時に達摩（達摩）來る。武帝は厚く佛教を信じて國政

道教

を顧みざるに至れり。かく佛教盛に行はれしかば、五胡中國に侵入したれども、夷狄殺伐の風を恣にするを得ざりき。秦・漢の際方士といふものありて、老莊の學に附會して道教を立て、神仙、不死の術を説き、大に人心を動かししが、晉以來道教は佛教と共に行はるゝに至れり。

第二十章 東北諸國の盛衰

朝鮮 柔然及び突厥

朝鮮

西晉の頃より、新羅我が日本に叛きて百濟と争ふ。高句麗も亦南下して百濟を侵す。南北朝に至りて、新羅遂に任那に在る日本府を毀つ（二年二二）。その後、日本は屢、新羅を征すれども利を得ず。新羅益勢を得たりしかば、高句麗恐れて更に百濟と同盟して、新羅に當る。これより新羅援を隋・唐に請ふに至

れり。

柔然

西晋以後、五胡皆中國を擾亂するに當り、東晋の初め、匈奴の一種なる柔然國を漠北に建て、勢盛なり。後屢、後魏に寇す。一時道武帝に破られしかども、復勢を得て北朝を侵ししが、遂に突厥に滅ぼさる(五年二二)。

突厥

突厥は柔然の部屬なりしが、漸次勢を得て、却りて柔然を滅ぼし、更に西方嚙噠チギスを滅ぼし、南方吐谷渾を併せ、東北契丹を降す。こゝに於てその領土、東は遼東より西は、アラル海に及び、南は青海より北は、バイカル湖に達し、頗る強大なり。南北朝の末、突厥東西に分れ、東突厥は屢、北朝に寇し、その歲幣を受く。突厥これより支那を輕じ、以て隋の時に及べり。

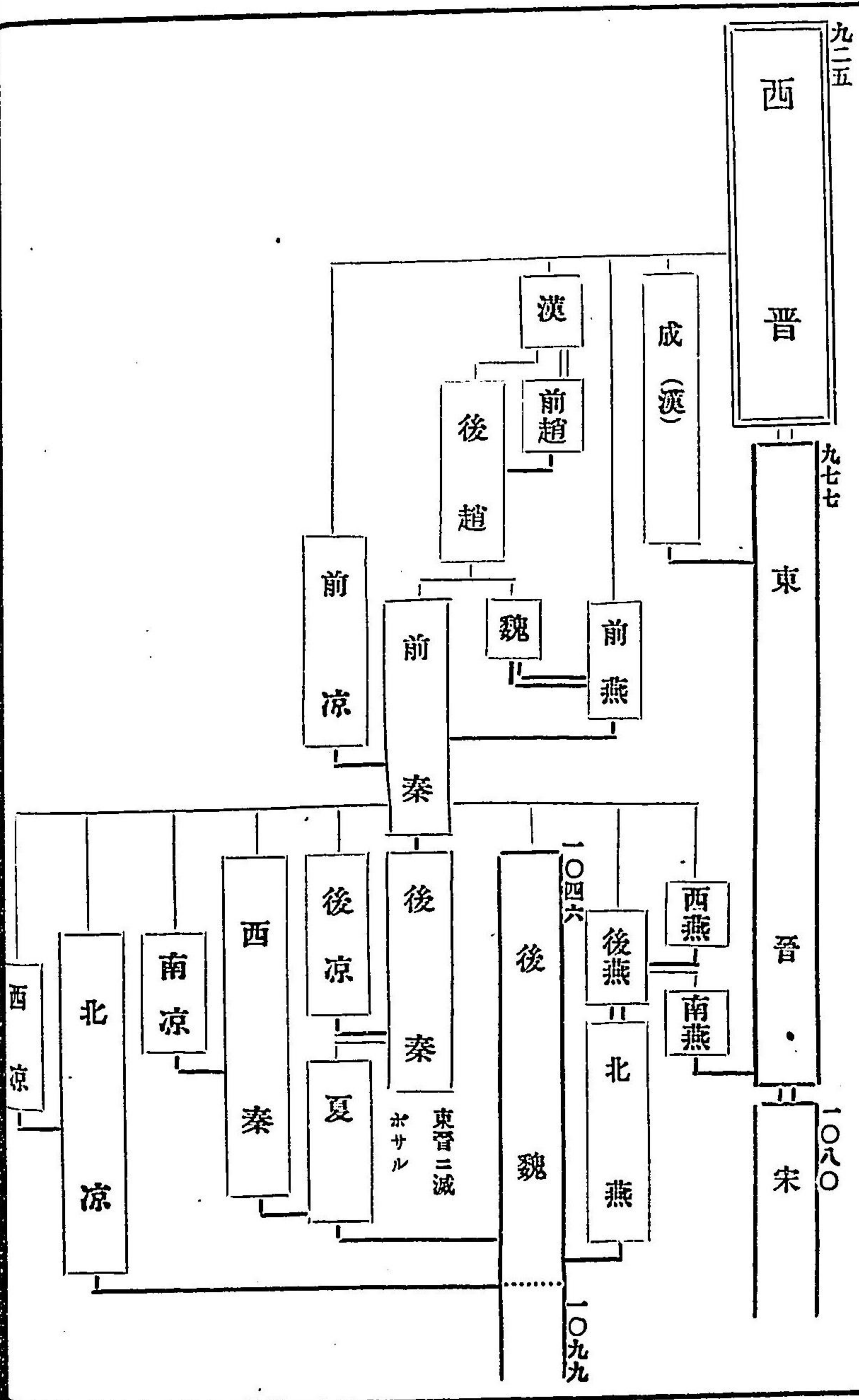
第二十一章 兩晉南北朝時代の概論

東漢以來塞内に來住せし諸夷族は、西晋の時に漸次強大となり、晋の内亂に乗じてこれを滅ぼせり。されば東晋再び興りたれとも、江南一帶の地を保つに過ぎずして、江北の地は諸夷族の紛争するところとなる。

宋晋室を篡ひ、後魏江北を一統し、南北相對立す。北朝常に強大なりしが、終に南北共に衰へ、隋に滅ぼされ、西晋の末以來の大亂始めて平らぐ。然れとも漠北の地には、突厥漸く強大となり、屢、南侵せり。

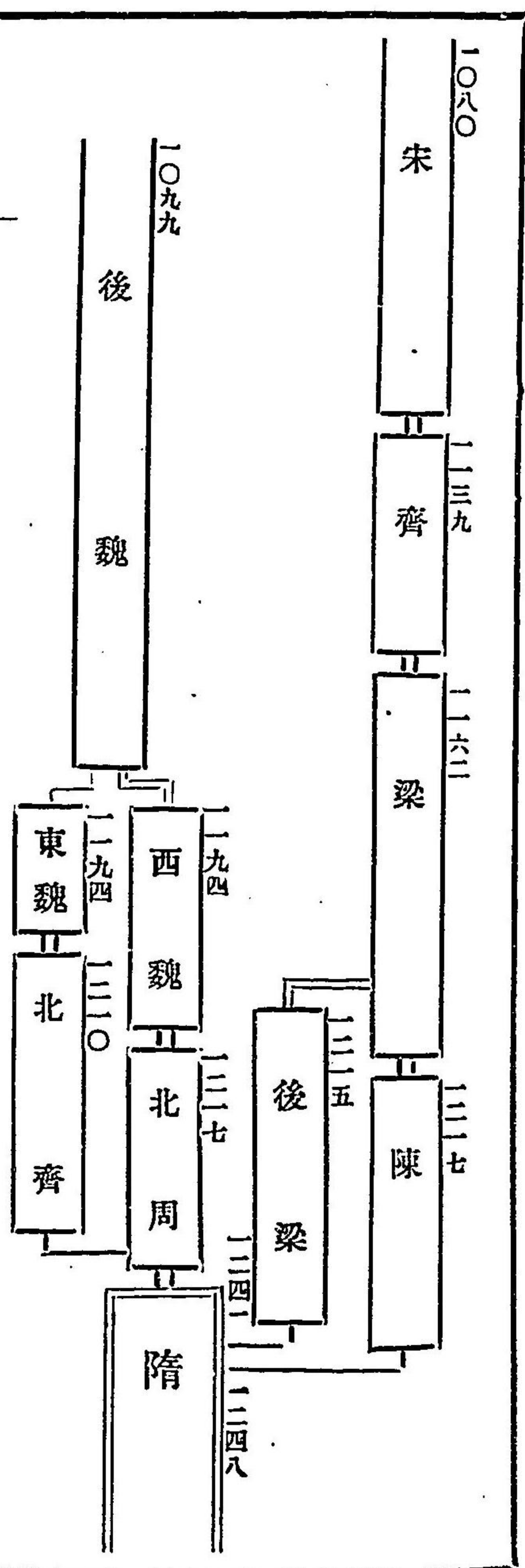
兩晋南北朝時代には、支那の制度、文物大に衰へたれども、前代にその端を發せし印度と支那との文明の關係は、益、密接するに至れり。

兩晉・五胡及び南北朝沿革略表



略年表

西晉一五一年間(九二五—九七六)
 西晉ガ三國を一統セシハ九四〇年ナリ
 東晉一〇三年間(九七七—一〇八〇)
 南朝一六八年間(一〇八〇—一二四八)
 宋一五九年間(一〇八〇—一一三九)
 齊一二三年間(一一三九—一一六二)



梁—五五年間(一六二—一二一七)
 後梁—一三二年間(一一一五—一二四七)
 陳—三一年間(一一一七—一二四八)
 北朝—一四二年間(一〇九九—一二四二)
 後魏—一四八年間(一〇四六—一一九四)
 後魏ノ江北ヲ一統シタルハ一〇九九年ナリ
 西魏—二三年間(一一九四—一二一七)
 東魏—一六年間(一一九四—一二一〇)
 北齊—二七年間(一一一〇—一二三七)
 北周—二四年間(一一一七—一二四二)
 西晋ノ建國—九二五年(應神天皇九五年)
 東晋ノ再興—九七七年(仁德天皇五年)
 東晋ノ滅亡(宋ノ篡立)—一〇八〇年(允恭天皇九年)
 後魏ノ一統—一〇九九年(允恭天皇二八年)
 隋ノ一統(陳ノ滅亡)—二四八年(崇峻天皇一年)

國 都

西晋—洛陽(河南省河南府)
 東晋南朝—建業(江蘇省江寧府)
 後魏—平城(山西省大同府)洛陽
 東魏齊—鄴(河南省彰德府臨彰縣)
 西魏周—長安(陝西省西安府)

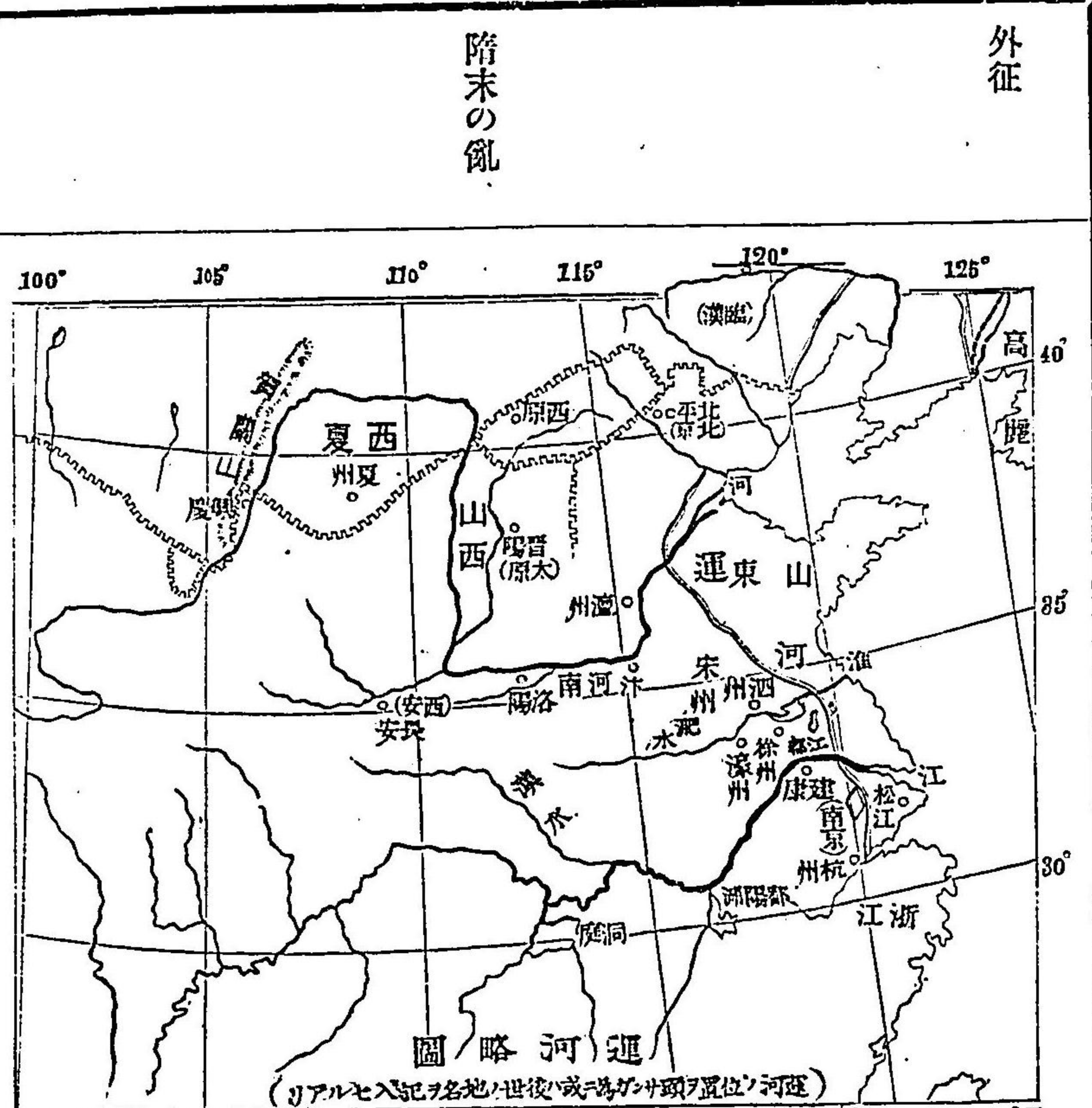
第四編 隋唐時代

第二十二章 隋の盛衰

文帝煬帝の業 隋末の亂

文帝の治
 隋の文帝専ら意を内政に用ひ、新制を設けて賦税を減じ、文學を奨励して風俗を改む。爲に多年の戦亂始めて治まる。文帝の次子廣人をして帝を弒せしめて自立す、これを煬帝とす。

煬帝の土木事業
 煬帝内は盛に土木を起し、外は遠征を事とせり。即位の後長城を増築し、洛陽に宮殿を造營し、運河を開通す。運河は大に人民を苦めたる土功なりしかども、後世に運漕の便を與へたる功は甚た大なり。



煬帝國の豊富なるに乗じて、頻りに外征を企て、**林邑**(今の交趾支)吐谷渾、**琉求**(今の臺灣)を伐ち、尋いで**高句麗**を征するに及びて大敗す。人民土木に疲れ、兵役に苦みしが、煬帝遼東に大敗するに及びて、天下始めて亂れ、盜賊・群雄並び起る。唐公李淵その次子世民と共に、突厥(第二十七章參照)

の後援を得て、兵を大原に挙げ、進みて長安に入る。時に煬帝江都に在り、李淵煬帝の孫恭帝を擁立す。尋いで煬帝その臣に弒せられ、李淵恭帝に迫りて禪を受く(八年二七)、これを唐の高祖とす。

第二十三章 唐の初世

唐初の内治外交 武韋の亂

唐の一統

唐の高祖即位の後、更に四方の群雄を征して一統の業をなす。世民唐の創業に與りて最も力ありしかば、高祖位を世民に傳ふ。これを太宗とす。太宗頗る英明にして、内は國政を治め、外は國威を發揚せり。

唐初の内治

太宗房玄齡・杜如晦・魏徵・王珪等を用ひ、制度を定め、學藝を興し、所謂貞觀の治を致す。殊にその制度は、後世の模範とする

唐初の外交

唐太宗



ところにして、我が國中古の制度は、これに基くもの甚た多し(第二十六章)太宗又李世勣・李靖等を用ひて、東突厥を征し、塞外諸國をして入貢せしめ、吐谷渾・吐蕃等を定めて、印度に通ず。高宗繼ぎて立ち、西突厥・百濟・高句麗を滅ぼす。こゝに於て唐の威令始と東・中・南亞細亞の全部に及ぶ。その

武氏の亂

突厥を滅ぼして宿昔の邊害を除きたるは重大事件にして、唐初は實に漢族隆盛の極といふべし(第二十七章參照)。高宗の初世は、内治外交その宜しきを得たれども、武氏を立て、皇后となすに及びて、唐室の禍を招けり。武后帝の病みて政を視ざるに乘じ、代りて事を決し、權を弄す。高宗崩じ中宗立つに及びて、武后これを廢し、中宗の弟睿宗を立つ。尋いで又これを廢し、宗室大臣の己に服せざるものを殺し、自ら帝位に登り、國を周と改む(一三五)。然れども武后明敏にして、能く狄仁傑、張柬之等の賢臣を用ひて、國政を料理したり。武后の病むに及びて、張柬之等武后に迫りて、中宗を復位せしむ(一三六)。

韋氏の亂

中宗の朝には、皇后韋氏又政に與り、賢臣を殺し、尋いで帝を

弑す。睿宗の子隆基兵を起し、韋后を斬り、睿宗を擁立し、後を禪を受く、これを玄宗とす。

第二十四章 唐の中世

開元の治 安史の亂

開元の治

玄宗即位の初めには、内は姚崇、宋璟、張九齡等を用ひて、前代の弊政を革め、所謂開元の治を致し、外は四方を經畧して、中興の業を遂げしかども、のち漸く政に怠り、奢侈を恣にし、小人を用ひ、遂に安史の亂を招くに至れり。

安史の亂原

玄宗賢相張九齡を廢して、奸臣李林甫を用ひたるは、治亂の分るところにして、のち楊貴妃を寵し、楊國忠を相とするに至り、亂原全く成る。

安史の大亂

安祿山はもと突厥の降將なり。深く楊貴妃に結びて帝の信

任を得て、官位を進められしが、終に兵を范陽に擧げて反し、直に洛陽を陥れ、大燕皇帝と稱す(一四一五年)。顏真卿、顏杲卿等兵を起して、恢復を圖りしかども、賊將史思明進みて長安に入る。帝蜀に出奔して、太子肅宗位に即く。已にして安祿山はその子慶緒に殺され、史思明はその子朝義に殺さる。代宗次いで立ち、史朝義を討ちて洛陽を復す。賊將遂に朝義を殺して官軍に降り、内亂始めて平らぐ(一四二三年)。この亂の後、吐蕃、回紇等入寇し、又藩鎮、宦官、黨争の禍並び起り、國運大に衰へたり。

第二十五章 唐の末世

藩鎮、宦官、朋黨の禍 唐末の大亂

藩鎮の禍

玄宗の時外夷を防がむが爲に、邊境の要地に十節度使を置

き、土地、兵馬の權を委す、これより節度使の勢力甚だ強し。安史の亂以後、内地にも節度使を増置す。代宗又賊の降將をも節度使たらしめしかば、藩鎮朝廷を輕じ、德宗の世に及びて、益、跋扈せり。

宦官の禍

德宗、順宗を輕て憲宗立つ。英明果斷にして能く藩鎮を制し、唐の威令再び行はるゝに至れり。然れども晩年に至り、政に怠りしかば、宦官の專横を招けり。宦官は玄宗の時より漸く勢力を得しが、德宗の時に至りて兵權を握り、終に憲宗を弑して穆宗を立て、又敬宗を弑して文宗を立てたり。文宗一時宦官を除かむとせしかども成らず、爾後宦官益、專横を極めたり。

朋黨の争

宦官の禍に加ふるに朋黨の争起れり。穆宗の時一方には李

唐末の大亂

德裕あり、一方には李宗閔、牛僧儒あり、各宦官の助を籍り、相軋して政權を争へり。黨争四十餘年に亘り、宣宗の時兩黨の首領死して、争僅に止むことを得たり。

宣宗英邁の資を以て、衰運を恢復せむとせしかども、宦官の專横に加ふるに、藩鎮再び勢を占められたれば、また如何ともすべからず。懿宗を経て僖宗の世に至り、賦歛急にして人民大に苦み、盜賊蜂起す(一五三五年)。黃巢最も勢あり、洛陽を陥れ、長安に入りて皇帝と稱す。沙陀の部長李克用起りて、これを平ぐ。これよりさき、黃巢の將朱全忠官軍に降る、事によりて克用と隙あり、屢これを襲ひ、天下大に亂る。昭宗立つに及びて、朱全忠長安に入りて悉く宦官を誅し、又帝を弑して哀帝を立て、遂に迫りてその禪を受く(一五六七年)、これを後梁の太祖とす。

第二十六章 唐の制度・學藝・宗教

制度 儒學 文藝 宗教

官制

唐初の官制は、中央政府に尙書中書門下殿中秘書内侍の三省あり。尙書中書門下の三省は政事を總攬し、その長官は宰相の權を有す。尙書省の下に吏部禮部兵部刑部工部の六部あり、政務を分掌す。玄宗の時、同平章事宰相の實權を握れり。地方には、府に牧尹、州に刺史、縣に令を置く。

兵制

唐初の兵制は、國內を十道に分ち、府兵の制を定む。のちに至りてその制壞れ、節度使兵馬の權を握るに至れり。

田制・學制等

田制は均田の制を用ひ、税法は租庸調の法を用ふ。學制は都鄙に學校を設け、經書を教課とし、秀才進士明經明法等の考試の科ありて、官吏登用法を定む。

儒學

太宗大に儒學を獎勵し、孔穎達・顏師古等をして、經義を一定せしむ。爾來儒學大に振興せしかども、所謂訓詁の學にして、未だ哲理の攻究に及ばざりき。

詩文

唐初の文章は、なほ六朝浮華の體を脱せざりしが、中世以後韓愈(退之)・柳宗元(厚子)等出でて、古文を唱へ、前代の文弊を一洗せり。詩も唐に至りて大に發達し、李白(太白)・杜甫(美子)・白居易(樂天)等出づ。

佛教・道教

唐には佛教・道教共に盛に行はる。太宗の時に玄奘(奘)、高宗の時に義淨(淨)出でて、共に印度に入りて苦學し、佛典を翻譯し、佛教の興隆に與りて力あり。武宗の時道教を國教とせしより、佛教稍衰ふ。

諸外教

唐代東西交通盛に行はれし爲に、妖教(波斯の)・景教(基督派)・摩

尼教(佛敎基督敎等を附會したるもの)等東流して唐に行はれしが、武宗の時

佛教と共に禁せられてより、漸次衰へたり。

第二十七章 東北諸國の盛衰

朝鮮 渤海 突厥 回紇

隋の文帝の時に、高句麗・隋を侵す。文帝これを伐ちて功なく、煬帝又大兵を發して、屢高句麗を征して大敗す。

唐の太宗の時に至り、百濟・高句麗相連合して新羅を侵す、新羅援を唐に求む。太宗乃ち親ら高句麗を伐ち、敗れて歸る。(三〇五)高宗立つに及び、兵を遣して百濟を征せしめ、日本と百濟との連合軍を破り、遂に百濟を滅ぼす。(三三二)尋いで高句麗の内亂に乗じて、これを滅ぼす。(一三三二八年第、三三三章參照)これよりのち、新羅は百濟の故地を侵し、又唐と戦ひ、唐の中

高句麗・百濟・新羅

渤海

世以後内亂續發するに及びて後、常に威を朝鮮に振へり。高句麗亡びてより、遼東に渤海國起る、渤海は靺鞨粟末部より起り、大祚榮に至り強大となり、玄宗に封せられて渤海郡王となる(一三三七)、爾後渤海益強大となりしが、五代の世に契丹の太祖に滅ぼさる(一五八六)。

突厥

東突厥は隋に服事せしか、隋末の亂に乗じて獨立す。唐の高祖起るに及び、突厥の力を籍りて創業の功を成ししかば、突厥唐に對して專恣なり。太宗立つに及び、李世勣、李靖を遣し、東突厥を滅ぼし(一三九〇年參照)、尋いで薛延陀を滅ぼす。

西突厥は波斯を略し、一時西域を領して強大なりしが、の内亂屢起り、遂に高宗に滅ぼさる(一三三四年參照)。

回紇

回紇は隋の末より、突厥及び薛延陀と争ひしが、のち東突厥

及び薛延陀の故地を領して唐に事へ、玄宗の封冊を受け(一四〇四年)、唐を援けて安史の亂を平けしより、常に功を恃みて唐の邊境を侵ししが、唐末に至り黠戛斯部に滅ぼさる(一四九〇年)。

第二十八章 西南諸國の盛衰

吐蕃 印度 波斯及び大食

吐蕃(今西藏)は唐の初めより、漸次勢を得て、吐谷渾、黨項を併せ、唐の太宗と戦ひ、互に勝敗あり。一時唐と和を結びしかども、反覆常なし。吐蕃漸次勢を得て、西藏の全部を領するに及び、代宗の時唐に侵入し、長安を陷る(一四二三年)、これより屢、回紇と共に、唐を侵して止まざりき。

印度

印度は大月氏の勢衰へてより、嚩唵に領せられしが、烏菴國(上印)起り、嚩唵を逐ひて全印度を統ぶ。唐の太宗吐蕃を征し

たるのち、交通を始めてより、屢唐に貢せしが、國運漸次衰へて分裂せり。

波斯大食の興廢

唐の初め、亞刺比亞に「モハメド」出で、兵力を以て布教を圖り、その死後、教徒は布教と征伐とにより、大食國を建つ。波斯は西突厥の亡びてより、東侵の患を免れたれど、東羅馬と争ひて國勢大に衰へ、遂に大食に滅ぼさる(一三一九年)。唐は高宗の時、始めて大食と交通せり。これより大食は四方を征服して國運隆盛を極めしが、宋の世に至りて、突厥人種に滅ぼさる(第三十五章參照)。

第二十九章 隋・唐時代の概論

隋南北を一統し、制度・風俗を改め、六朝以來殺伐の弊風を一

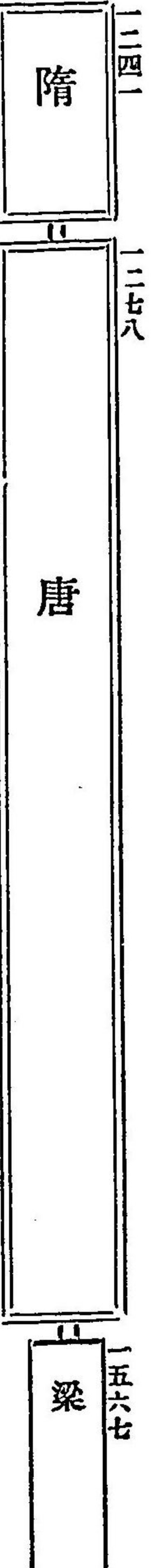
洗せしかども、その治世久しからずして亡ぶ。隋の興亡は實に秦と相似たりといふべし。

唐は隋の後を享け、治亂盛衰の跡を考へ、支那南北地方の長所を取りて、天下の混一を致す。唐は制度を整備し、文物を獎勵し、武略を尙びて、國威を四海に發揮し、百般の事業その規模の宏遠なること、西漢以來始めて見るところなり。實に唐初は漢族極盛の時代といふべし。然れども唐末藩鎮の制を採るに及び、將帥兵權を專有し、尾大不掉の有様に陥り、遂に國家分裂して亡ぶ。

唐の國運隆盛を極むるに當りて、四方の諸國或は服屬し、或は交通したりしが、その衰ふるに及びて、みな離叛せり。然れども唐の國威一時四方に普及せし結果として、西亞の文明

東流し、支那の文明廣く傳播せり、我が國が支那の文物を盛に輸入せしむ、實にこの時代なり。

隋・唐沿革略表



略年表

- 隋—三七年間(二四一—二七八)
- 隋ノ南北チ一統シタルハ—二四八年ナリ
- 唐—二八九年間(二七八—一五六七)
- 隋ノ建國—一二四一年(敏達天皇一〇年)
- 唐ノ纂立隋ノ滅亡—一二七八年(推古天皇二六年)
- 唐ノ滅亡(後梁ノ纂立)—一五六七年(醍醐天皇延喜七年)

百濟ノ滅亡—一三三三年(天智天皇踐祚二年)
 高句麗ノ滅亡—一三二八年(天智天皇即位元年)

國 都

隋唐—長安(陝西省西安府)

第五編 五代・宋時代

第三十章 五代及び宋の初世

五代の興亡 宋の太祖の創業 宋遼の關係
西夏の興起

後梁

後唐

後晋

後梁の太祖即位ののち、割據の群雄は多く、中にも李克用最も強大なり。克用の子存勗終に末帝(太祖の子)を滅ぼして位に即く、これを後唐の莊宗とす。已にして王族李嗣源位を篡ふ、これを明宗とす。廢帝(明宗の養子從珂)立つに及び、石敬瑭と隙あり、敬瑭遂に契丹(參章末)の援を得て、後唐を滅ぼして位に即く、これを後晋の高祖とす。

後晋の高祖は契丹に對して臣禮を執りしかども、その子出

後漢

後周

宋太祖の創業

遼の興起

帝は禮を失ひしかば、契丹大舉して後晋を攻めて、これを滅ぼす。契丹兵を引きて北に還り、劉知遠位に即く、これを後漢の高祖とす。その子隱帝の時に至り、郭威帝位を篡ふ、これを後周の太祖とす。太祖に次いで世宗立つ。英邁にして天下統一の志あり、内は割據の諸州を平定し、外は遼を征したれども、中途にして病死す。子恭帝立ちて幼弱なりしかば、趙匡胤將士に擁せられて位に即く(一〇六三)、これを宋の太祖とす。太祖意を藩鎮の宿弊に注ぎ、漸次その兵權を収め、且民力を休養し、風俗を敦厚ならしめむとす。内治略、整ふに及びて、四方を討平せしが、獨り北漢遼の後援を恃みて降らず、太宗立つに及びて、遂にこれを滅ぼす(一〇六三)。

太宗北漢を滅ぼして、支那本部を一統してより、更に進みて

宋遼の關係

遼と戦ふ。遼初め契丹と云ひ、唐末より北方に雄視し、耶律阿保機に至りて強大となり、東は渤海を滅ぼして遼東を取り、内外蒙古を平け、帝と稱す(一五七)これを太祖とす。その子太宗に至り、後晋を助けて後唐を滅ぼし、北邊の地を割取す。尋いで後晋を滅ぼして、國を遼と稱す(一六〇)宋の太宗に至り、屢遼と戦ひて志を得ず。眞宗立つに及びて、遼の聖宗大舉して南侵す。眞宗親征して澶淵に至り、宋より每歲幣を納るゝことを約して和を結ぶ(一六六)。

仁宗の治

眞宗の次に仁宗立ち、韓琦、范仲淹、富弼、歐陽修、司馬光等の名臣を用ひて、治に勵みしかども、北は遼の攻伐を受け、西は西夏の侵略を蒙れり。西夏は黨項の後にして、宋の太宗の時一たび來貢したりしが、仁宗の時に至り、李元昊大夏皇帝と稱

西夏の興起

し(一六九)頻りに西邊を侵せり。時に遼亦南侵せしかば、仁宗遼に對する歲幣を増し、西夏に向ひて歲幣を贈ることを約して和を結ぶ(一七〇)。

第三十一章 宋の中世

神宗の新政 哲宗の改復 徽宗の紹述

神宗の新政

仁宗より英宗を経て、神宗位に即く。帝積弊を一掃して、國を富強にせむとし、王安石の策を用ひ、改革を議し、青苗保甲市易等の新法を興し、又兵を出して夏を征せり。然れども外征その功を奏せず、老成名臣等みな保守論を主張して、改革を排斥し、相繼ぎて朝を去るに至れり。こゝに於て王安石自黨の人士を集め、専ら改革に従事して、新法を行へり。新法の意は富國強兵にあれども、一には改革の急激に過ぐるを以て

民心を失ひ、一には老臣・儒生等の賛成を得ずして、年少氣銳の徒の施行するところとなりしを以て、實益少く紛争甚しかりき。

哲宗の改復

神宗崩じ、子哲宗立つに及び、宣仁太后司馬光等を用ひて、盡く新法を廢し、保守黨をして政府を組織せしむ(第一變の)。太后崩じ、哲宗政を親らするに及び、盡く保守黨を斥けて、章惇等の改革黨を用ふ(第二變の)。これを紹聖(年號)の紹述と云ふ。これより紛擾甚しく、政令大に紊る。

徽宗の紹述

哲宗崩じ、徽宗立ち、向太后政を攝し、改革黨を斥けて保守黨を用ふ(第三變の)。太后崩じ、徽宗政を親らするに及び、改革黨蔡京、紹述を名として政を專にすること二十年に及ぶ(第四變の)。加ふるに帝奢侈を恣にして、國勢疲弊し、外には邊境に事多

く、遂に宋室南渡の禍を招く原因となれり。

第三十二章 宋・遼・金の關係

遼金の廢興 宋金の交渉

金の興起

宋の衰ふると共に、遼も亦政令亂れ、女眞の侵略を蒙れり。女眞は靺鞨の一部族にして、今の滿州黑龍江地方より興り、阿骨打に至り強大となり、頻りに遼を破り、自ら皇帝と稱し、國を金と號す(一七七年)。これを太祖とす。宋の徽宗童貫の議を用ひて、好を金に通じ、遼を夾撃す。金は大に遼を破りしかども、宋は毎に遼に敗らる。故に宋と金と戦利を分つに當り、宋は僅に燕京(遼の南京)と六州とを得て約を結ぶ(一七八二年宋)。已にして金の太祖死して、太宗立つに及び、西夏の降を許して、遼を滅ぼす(一七八五年)。

遼滅亡

汴京の陥落

金の太宗遼を滅ぼしてより、直に宋を併呑せむと欲し、進みて國都汴京(河南省開封府)を圍む。時に欽宗宋に君たり、李綱固く主戦論を唱へしかど行はれず、帝遂に土地の割讓を約して和を媾す(第一七八六年)已にして金再び來り侵し、汴京を陥れ、徽宗・欽宗を擒にして北に歸る(一七八七年)。

宋室の南渡

高宗河南に即位し、主戦論を執りて宋室の恢復を圖りしが、幾ほくもなく意を北方に絶ち、都を揚州(江蘇省揚州府)に移す。金益南侵せしかば、帝遂に臨安(浙江省杭州府)に移り、南宋の國都とす。當時韓世忠・岳飛等力を盡して金を防ぎ、南宋僅に自立するを得たり。秦檜相となるに及びて、金に臣事し、幣を納れむことを約して媾和す(第一八〇一年)。

和宋金の媾

のち金の世宗立ち、盟約を破りて宋を侵す。時に孝宗宋の位

にあり、よく金を防ぐ。金遂に志を得ずして媾和す(第一八二五年)。世宗・孝宗共に英明にして相對峙し、彼我乗ずべき隙なく、兩國小康を得たり。

孝宗より光宗を経て、寧宗に至り、韓侂胄權を弄し、朱熹等を排し、金を伐ちて却りて敗られ、歲幣を増して和を結ぶ(一八八四年)。第五回交渉これより宋の國勢益衰ふ。

第三十三章 金・宋の滅亡

金の滅亡 南宋の滅亡

金の滅亡
宋は寧宗の次に理宗立つ。時に蒙古は西夏を滅ぼし(一七八七年)、尋いで理宗と計り、金を夾撃してこれを滅ぼす(一八九年)。蒙古金を滅ぼしてより、又宋を侵す。理宗位に在ること久しくして政を怠り、賈似道權を振ひ、私に使を蒙古に遣し、臣と稱し

南宋の滅亡

て和を請ふ。蒙古これを許し、又國號を元と改む(第三十八章參照)。理宗、度宗を経て恭宗立つ。賈似道常の權を專にして政を亂す。元大軍を發して來り侵す。恭宗賈似道を斥け、文天祥・張世傑等勤王の士を徵して、これを防ぎしかども克たず、國都臨安遂に陥り、帝出でて元(一九三)に降る(五年)。

陸秀夫・張世傑等、端宗を福州に迎へ立て、文天祥と共に宋室の恢復を圖りしかども志を得ず。端宗崩じて弟昀立つ。元大舉して來り攻む、陸秀夫帝を擁して崖山(廣東河口の島)に遷る。後崖山陥り、帝海に沈みて崩す、こゝに於て南宋亡ぶ(一九三)。

南宋國を建てよより、政亂れ兵弱く、強大の敵國を有して遂に滅亡を招きたれども、その亡ぶるには、唐と趣を異にして、忠臣義士多く現はれたり。これ太祖以來大に節義を獎勵し、

加ふるに學者輩出して道德を講じ、忠君愛國の思想を養成せしに因るものにして、宋代の美點といふべし。

第三十四章 宋代の學藝・宗教

儒學 文藝 宗教

儒學

漢・唐訓詁の學久しく行はれて、舉世稍厭棄の念を生ず。學者は新説を出さむとすれども、爭亂相繼ぎ、學術を研究する暇なし。宋天下を治むるに至り、所謂性理學興り、學風爰に一變せり。理學は無形の性理を推考し、陰陽交存して萬物を化育するの理を悟りて、行事に應用せむとするにあり。理學の鼻祖は周敦頤(濂溪)にして、その門に程顥(明道)・程頤(伊川)あり、二程と同時に張載(横渠)あり、みな盛に理學を唱導す。南宋に至り朱熹(晦庵)出で、大に二程の説を主張して、理學を大成せり。朱熹と同時

文藝



朱熹

陸九淵

朱熹

に陸九淵(象山)あり、朱子の窮理を先とするに反し、徳行を重ずるを旨とせり。

宋初の文章は見るに足らざるも、歐陽修(永叔)出づるに及びて大に振ひ、これより蘇洵(老泉)・蘇軾(東坡)・蘇轍(子瞻)・曾鞏(固子)・王安石(介甫)出で、唐の韓柳と併せて唐宋八大家と稱せらる。詩には梅堯臣・黃庭堅あり、

宗教

就中歐陽修・蘇軾最有名なり。要するに宋は文章に於ては、唐を壓する勢あれども、詩は到底これに及ばず。佛教は唐の武宗以來衰へしが、宋に至りてこれを保護せしかば、再び興り、中にも禪宗最も盛に行はれ、儒學に影響を及ぼせり。道教は眞宗以來徽宗に至る間は、歷朝これを尊信せしかば、大に勢を得たりしかども、その後は漸く衰へたり。

第三十五章 朝鮮及び西域

高麗

唐宋より五代に至り、新羅の威振はず、朝鮮の地大に亂れて分裂す。王建高麗國を建て、王と稱し、遂に朝鮮を一統す(九七)。以後高麗常に五代宋に事へて、その封冊を受けしが、遼金の盛なるに及びて、又相繼ぎてその封冊を受けたり。

族「セルシユク」

突厥の唐に滅ぼさるるに及びて、突厥人種多くは逃れて大食國(第二章二十八)に入りしが、のち漸次勢力を得て、宋の眞宗の頃、突厥人の一種塞爾受克族強大となり、大食國を滅ぼし、波斯及び印度地方を領す。

西遼

遼の金に滅ぼされし(第三章十二)のち、その遺族天山の西北(今丹耳其斯)に建國して西遼と稱し(五年七八)、頻りに塞爾受克族を侵略す。こゝに於て西遼塞爾受克に代りて一時威を西域に振へり。

國「ホラズム」

塞爾受克族衰へ、その部下の將自立して主家を滅ぼし、阿母河邊に花刺子摸國を建つ。默呼(ハム)その王たるに及びて、乃蠻(ノマン)と謀りて西遼を滅ぼし(一年八七)、阿富汗斯坦を併呑し(五年八七)、西域に雄視す。蒙古興隆して花刺子摸と衝突せり(第三十七章參照)。

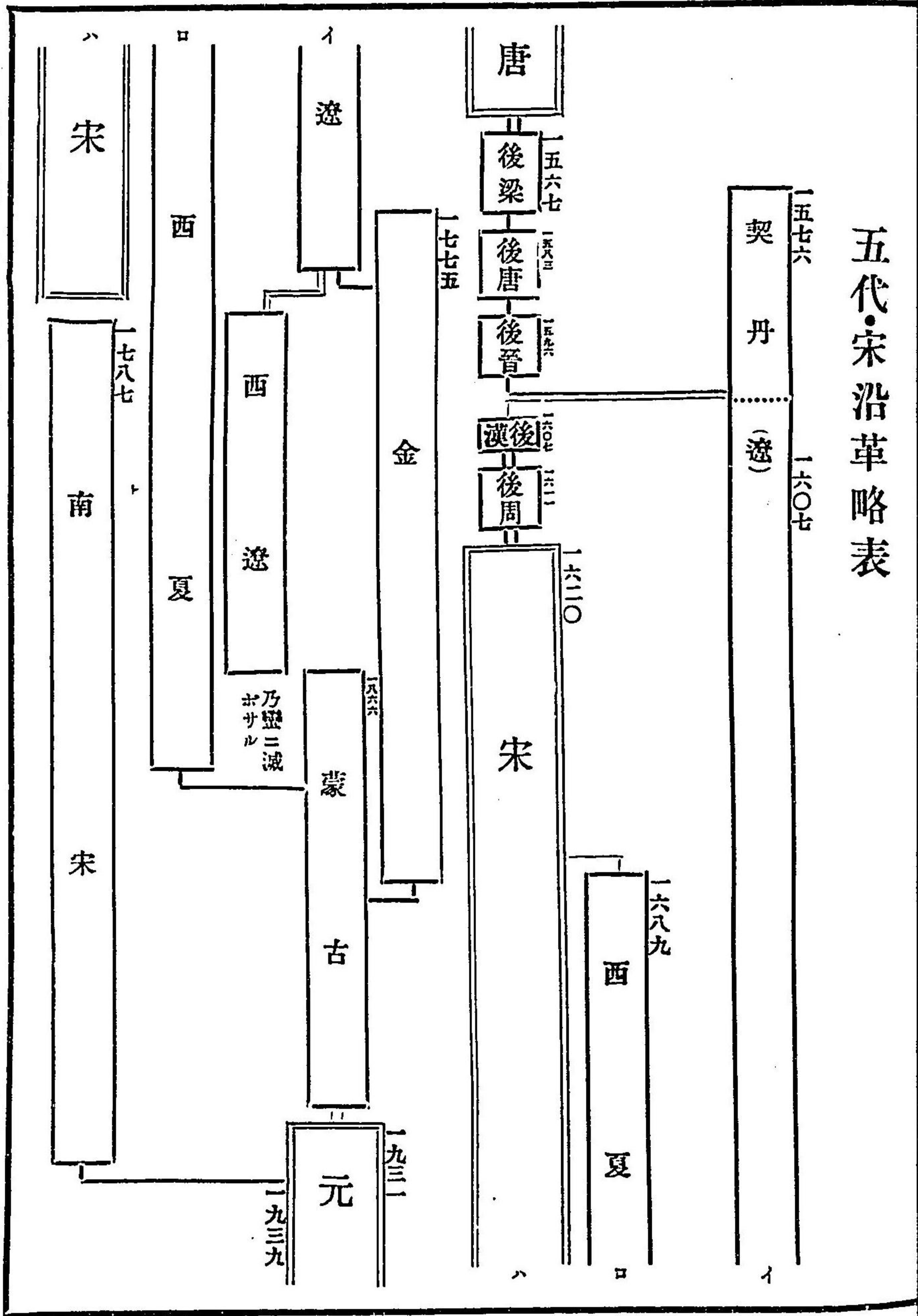
第三十六章 五代・宋時代の概論

唐亡びてより、後梁・後唐・後晋・後漢・後周の五代相繼ぎて起る。この間天下大に亂れ、篡奪・弑逆の外記すべきことなしといふも不可なし。

宋は五代の後を享けて、内政は寛厚を主とし、文を貴び武を卑み、外交は寧ろ軟弱に流るとも、常に和誼を全うして兵争を避けむことを務む。故に遼・金・西夏等の爲に屢、境土を侵略せられ、終に蒙古に滅ぼさる。漢・唐の威武を四方に輝かしたるに比すれば、宋は遙に虚弱なりといふべし。然れども宋の學術は訓詁・註釋の域を脱して、哲理の攻究を起すに至りしは、支那文明の上に於て忘るべからざることなり。而して北

宋金に逐はれて江南に遷りしより、南部は次第に殷富の區となり、北部は金・元の争を経て、益々衰退するに至りしことも、亦支那南北部開化の上に於て、最も注目すべきことなり。要するに五代・宋時代には、漢族の勢力漸次微弱となりて、他族に壓せられしが、蒙古族大に興りて、諸國を征服し、威を全亞及び歐洲に振ふに至れり。この間東洋の形勢は、頗る複雑なりといふべし。蒙古族の他族経略の状況は、便宜の爲に次編に説かむ。

五代・宋沿革略表



略年表

五代—五三年間(二五六七—一六二〇)
 後梁—一六年間(一五六七—一五八三)
 後唐—一三年間(一五八三—一五九六)
 後晉—一一年間(一五九六—一六〇七)
 後漢—四年間(一六〇七—一六一一)
 後周—九年間(一六一一—一六二〇)
 宋—一六七年間(一六二〇—一七八七)
 南宋—一五二年間(一七八七—一九三九)
 宋南宋ヲ通算スレバ三一一年間ナリ
 契丹(遼)—二〇九年間(一五七六—一七八五)
 西遼—八六年間(一七八五—一八七一)
 西夏—一八九年間(一六九八—一八八七)
 金—一一九年間(一七七五—一八九四)
 後梁ノ篡立(唐ノ滅亡)—一五六七年(醍醐天皇延喜七年)

宋ノ建國—一六二〇年(村上天皇天德四年)
 宋ノ滅亡—一九三九年(後宇多天皇弘安二年(北條時宗ノ時))
 契丹(遼)ノ建國—一五七六年(醍醐天皇延喜十六年)
 遼ノ滅亡(西遼ノ建國)—一七八五年(崇徳天皇天治二年)
 西遼ノ滅亡—一八七一年(順徳天皇建曆元年)
 西夏ノ興起—一六八九年(後朱雀天皇長曆二年)
 西夏ノ滅亡—一八八七年(後堀河天皇安貞元年)
 金ノ興起—一七七五年(鳥羽天皇永久三年)
 金ノ滅亡—一八九四年(四條天皇文曆元年)
 蒙古ノ興起—一八六六年(土御門天皇建永元年(源實朝ノ時))
 高麗ノ一統—一九九七年(後醍醐天皇延元二年)

國 都

五代(後唐ヲ除キ)北宋—汴(河南省開封府)
 後唐—洛陽(河南省河南府)
 南宋—臨安(浙江省杭州府)

近古史

第六編 元明時代

第三十七章 蒙古の勃興

蒙古の勃興 太祖の西征

蒙古の勃興

太祖の西征

蒙古世々黒龍江上流の地に居り、遼・金に歴事せり。宋の寧宗の時、鐵木眞部屬を糾合し、乃蠻(阿爾泰附近)以下内外蒙古の諸部を征し、大汗となり、成吉思汗と稱す(六年八六)。これを太祖とす。尋いで成吉思汗西夏を降し、金を破り、更に轉して西域に向ふ。時に花刺子摸王默呼威を西域に振ひ(章第三十五)蒙古の商民を殺害せしかば、成吉思汗大に怒り、四子朮赤、察合台、阿濶台、拖雷と共に、花刺子摸を征す。默呼大敗して、裏海島中に死

す(八年八八)蒙古の軍更に裏海の南方を廻り、高加索地方より、俄羅西(露西)の南方を侵して還る。

成吉思汗東に還るに及びて、さきに降りし西夏を全く滅ぼし(七年八八)尋いで金を伐たんとして、途に病死す。第三子阿濶台大汗となる、これを太宗とす。

第三十八章 蒙古の侵略

太宗の南略 拔都の西征

憲宗の南征 旭烈兀の西征

太宗の南略

太宗、太祖の遺志を奉じ、拖雷と共に金に迫り、宋と通じて金を夾撃して、これを滅ぼす(章第三十三)。尋いで高麗を伐ちてこれを破る。

拔都の西征

太宗、拔都(朮赤)をして、貴由(太宗子)・蒙哥(施雷子)・海都(貴由の弟)等と共に

に西征せしむ。蒙古の軍直に俄羅西に入り、「モスカウ」、「キエフ」を陥れ、更に一軍は南方馬札兒(今の匈牙利)を攻め、一軍は北方孛烈兒(今の波蘭)を侵す。蒙古の北軍大に北歐王侯の連合軍を、「ワールスタット」(リグニツの附近)に破る(一九〇一年)。會太宗の訃音達せしかば、拔都諸將を本國に還し、自ら南露に留りて金黨國(欽察國)を建つ(一九〇三年)。

太宗崩じて定宗(貴由)立つ、又幾ばくならずして崩じ、憲宗(蒙哥)立つ。一方には弟忽必烈(クビライ)をして南征せしめ、一方には旭烈兀(ウルグ)をして西征せしむ。

憲宗親ら大軍を率ゐて、忽必烈と共に南下し、宋を攻めしが、中途に崩す(一九一一年)。宋使を遣して和を請ふ。忽必烈本國の動搖を聞き、直にこれを許し、北に還りて大汗となる(一九一〇年)。

憲宗の征西

れを世祖とす。帝内亂を定め、都を燕京(今の北京)に奠めて、國を元と號す(一九三一年)。尋いで伯顔(バヤン)をして宋を攻めしめて、これを滅ぼす(第三十三章參照)。旭烈兀波斯地方の回教徒を破り、「バグダード」を陥れ(一九一八年)。印度北部を服し、更に西方に進まむとせしが、會憲宗の訃音達せしかば、軍を班す。

第三十九章 元の盛運

世祖の一統 世祖の東南經略 元の極盛

世祖英明にして大度あり、よく人材を登用して内治の改善を計り、制度を定め、稍、完全の状をなせり。世祖宋を併せ、支那を一統してのち、専ら東南の經略に従事せり。

高麗は蒙古の世に及びて、一旦これに降りしかども、のち叛服常なかりしかば、世祖更に高麗を定めて、全く元の外藩と

世祖の一統

世祖の東侵

なせり。

尋いで世祖高麗を介して、我が日本國を招致せしかども、我が國これに應せざりしかば、大兵を以て我が國に寇して大敗す(一九四)。

世祖の南侵

世祖更に轉じて南方を經略し、緬國(緬甸)を降し、又交趾・占城を征服せり。こゝに於て南洋諸島も亦來貢するに至れり。

元の極盛

此の如くにして、元は空前絶後の大版圖を有し、東は日本海・支那海に濱し、西は歐洲中部に墜し、南は印度・安南地方に及び、北は西伯利亞に接す。元本部はこの大版圖の主權を握り、伊兒・欽察・察合台・阿濶台汗國以下の諸封地を統治せり。元は太祖以來、武力を尙びて併吞を事とせしかども、世祖支那を一統して後は、頗る心を民力の休養に注ぎ、殖産・工業を

保護獎勵し、交通を便にし、貿易の發達を計れり。元時海運の盛なること前後に冠たるべし。

第四十章 元の衰亡

海都汗の反亂 帝位繼承の紛争 財政の紊亂

世祖天下を一統して、元隆盛の極に達せしかとも、未だ幾はくならずして、漸次衰運に向へり。その原因を概括すれば、海都汗の反亂、帝位繼承の紛争、財政の紊亂にありといふべし。左にこれを略説せむ。

海都汗の反亂

初め太宗崩じて憲宗蒙古の大汗となりしかば、太宗の子孫みな平ならず、憲宗の崩後阿里不哥を奉じて、世祖と争ひたりき。世祖の東南を經略せるに乗じて、太宗の孫海都、窩濶台汗國の諸王を誘うて世祖に反す(一九二)。

國は元に従ひ、欽察汗國は察合台汗國と共に、窩濶台汗國に應じ、海都を擁して大汗となす(一九二)尋いで伊兒汗國は、内亂の爲に國力衰へ、滿州地方の諸王また海都に應せしかば、海都は世祖を撃破せむとして、却りて敗れ退く。

世祖崩じて孫成宗立つ、幾はくならずして海都亦死し、察合台・阿濶台二汗國元に降る。成宗崩じ武宗立つに及びて、阿濶台汗國又反せしかども、直に討滅せらる(一九六)この亂實に四十餘年に亘り、大に國力の疲弊を招けり。

帝位繼承の争
武宗の次に仁宗立ち、一時民力の休養を務む。英宗泰定帝、天順帝・明宗・文宗・寧宗を経て順帝に至る。抑、元は父子世襲の法なきを以て、繼承の際常に紛争を生じ、篡奪相繼ぎ、權臣その間に乘じて國政を紊る。順帝に至りて朝政大に衰へたり。

財政の紊亂

元は外征・内亂相踵ぎ、國用給せざりしかば、世祖交鈔(紙幣)を濫發し、又頻りに収歛を事とし、人民大に苦む。加ふるに世祖以後、歷朝喇嘛教(佛敎の一種)を信すること厚く、これに對する費用甚だ多く、順帝に至りてその極に達す。且順帝奢侈淫樂を恣にし、財政益紊亂せり。

こゝに於て盜賊蜂起し、豪傑並び起る。朱元璋兵を濠州(安徽省鳳陽府)に擧げて群雄を討滅し、江の南北を略し、部將をして元の大都(燕京)に迫らしむ。順帝出で、漠北に逃る(二〇二)。元璋乃ち帝位に即く、これを明の太祖とす。

第四十一章 明の初世

太祖の創業 靖難の役 成祖の遠略 明の極盛

太祖の創業

明の太祖匹夫より起り、群雄を討平し、支那本部を一統し、元

靖難の役

を漠北に逐うて、明室の基礎を定立せり。又唐宋の制度を酌量して、制度・法律を定め、教育を布き、明の典禮を整備す。然れども太祖は、宋・元帝室孤立の弊に懲り、王族を要地に分封して藩屏とせしかば、その弊は又内亂を招くに至れり。太祖崩じて惠帝立ち、諸王を抑壓し、その怨望を招く。燕王棣(惠帝の叔父)機に乗じて反す。さきに太祖功臣宿將を殺しよかば、内に一人の惠帝を助くるものなく、燕王直に金陵を陥れ、帝を逐うて自立す(二年〇六)。これを成祖とす。尋いで成祖都を燕京に遷して北京とし、舊都金陵を南京とす。成祖頗る雄畧あり、南征北伐して大に國威を振張せり。然れども宦官を寵用して、禍亂の原因を作りしは惜むべし(第十三章參)。

成祖の遠略

元の順帝漠北に退きしより、その遺族國を韃靼タタールと稱し、支那本部を併呑せむとす。成祖屢北征して大にこれを破る。支那本部復韃靼の手に歸せざるものは帝の力なり。元の亡ぶる時、安南にては陳氏王位にありしが、成祖の初めその臣黎季犛リキセン篡立して、國を大虞と稱す。成祖大舉してこれを討滅し、南洋諸國亦來貢するもの多し。

明の極盛

成祖の後、仁宗・宣宗相繼ぎて立ち、國力を休養し、民庶を愛撫す。これを明の極盛の時とす。たゞ宣宗の時、屢叛亂あるの故を以て、安南の獨立を許したるは、弱を示すものといふべし。

第四十二章 帖木兒の兼併

元三汗國の盛衰 帖木兒の雄略

起 帖木兒の興

明の初め鐵木眞の後裔と稱する帖木兒、阿母河の下流より

起りて悉く中央亞細亞を併呑し、サマルカンドに都し(二〇二) 察合台汗國の衰へたるに乗じて、これを平定し、又好を明に通じて、花刺子摸及び伊兒汗國を併せ、進みて欽察汗國と戦ふ。

三汗國の盛衰

欽察汗國は建國以來、國運最も隆盛なりしが、そのち争亂相繼ぎ、拔都の正統絶ゆるに及びて、白黨、月即別、哥里米の三汗互に相争ひ、明の初め哥里米汗は、帖木兒の援を得て、欽察汗となれり。然るに、のち哥里米汗、帖木兒の領地を侵ししかば、帖木兒攻めて大にこれを破り、白黨汗を立て、欽察汗となす(二〇五)のち三汗相争ひしが、漸次露西亞に滅ぼさる。

帖木兒の雄略

帖木兒更に轉じて印度に侵入し、特里を陥れ、又進みて當時西亞に雄視せし阿斯曼土耳其國を伐ち、大にこれを破り、小

亞細亞を平定せり(二〇六)。

帖木兒既に四方を征服せしかば、更に明を滅ぼして、世界を一統せむと欲し、蒙古の恢復を名として、東征の師を發せしが、途に病死す(二〇六)明爲にその侵略を免れ、帖木兒の領土は忽ち瓦解し、阿斯曼土耳其國勢を回復せり。

第四十三章 明の中世

土木の變 俺答の寇 宦官の禍

仁宣二帝の盛時を経て、英宗立つに及びて、内は宦官權を專にし、外は外敵の侵寇あり、明の國勢始めて衰ふ。

土木の變

韃靼の衰ふるに乗じて、瓦剌部漠北を一統し、明を侵さむとして、成祖に破られしが、英宗の時宦官王振、瓦剌の怨を買ひ、その部長也先の入寇に逢ふ。帝王振に擁せられて北征し、土

木(直隸省宣化府)に大敗して虜となる(二一九年)。帝の弟景帝即位し、于謙政を執り、屢敵を破り、爲に英宗も還ることを得たり。瓦剌これより衰へ、韃靼再び勢を得るに至れり。

英宗景帝を廢して重祚し、次いで憲宗を経て、孝宗立つ。帝弊政を革め、明一時中興す。武宗立ち、宦官事を用ひ、又寧王宸濠の亂あり、王守仁(陽明)これを討平す。世宗穆宗の際には、内憂外患並び起れり。

俺答の入寇

世宗の時に、韃靼の部長ト赤屢、明に入寇し、その従弟俺答(アハダ)益々侵略を恣にし、遂に大舉して山西に入寇し、子女牛馬を奪掠すること甚しかりき(二一九年)。のち俺答吐蕃を征服し、喇嘛教を信ずるに至りて入寇せず。明爲に事無きを得たり。

宦官の禍

外敵入寇の頻繁なる所以は、内に宦官權を弄して、政令の紊

亂を招きしによる。明の初め太祖、惠帝共に宦官をして政事に干與せしめざりしが、成祖の時宦官始めて政務に參與するに至る。のち英宗の時に、王振權を專にし、土木の變を招き、憲宗の時に汪直(ウァンヂ)專權を極め、武宗の時に劉瑾(リウキン)あり、明末熹宗の時に魏忠賢あり、宦官の害益深く、遂に國家を覆すに至れり(第四十六章 章參照)。

第四十四章 日・明・韓の關係

倭寇 朝鮮の建國 朝鮮の役

倭寇

我が日本國の唐と交通せしは、獨り朝廷のみにして、人民が彼と貿易を營みしことは少かりき。明初に至り、我が國南北朝の争亂に際し、西南地方の人民、私に支那貿易を試み、又朝鮮・支那の沿海を侵掠す。明これを倭寇と稱して畏怖す。足利

朝鮮の建國

義滿以後、常に明と和して貿易盛に行はれしが、のち明の國勢衰へ、我が國も諸侯分争して、戦亂相續ぎしを以て、我が不逞の人民は、復彼の地に侵寇すること甚しかりき。世宗立つに及び、大に倭寇を撃破し(三二二)、その患漸く止みたり。元の世に在りては、高麗はこれに服事せしが、明起るに及び、李成桂自立して王位に即き、明の太祖の封冊を受け、國を朝鮮と稱す(三〇五)、これ乃ち今の韓國王統の祖なり。これより朝鮮常に明に服事せり。

朝鮮の役

明の世宗、穆宗を経て神宗立つ、時に李哈朝鮮に王たり。我が豊臣秀吉好を朝鮮と通じ、尋いで李哈をして征明の師の嚮導たらしめむとす。李哈これを聽かさりしかば、秀吉大に怒り、まづ朝鮮を伐ち、大にこれを破る。李哈義州に奔りて、援を明に請へり。神宗即ち大軍を以て朝鮮を救はしむ。然れども明軍連りに敗れしかば、沈惟敬を遣し、和を議せしむ。已にして和議の條件秀吉の意に満たざるの故を以て、再び兵を交ふるに至りしが、會秀吉薨じて戦止む(八二五)。この役前後七年に亘り、明及び朝鮮の國力甚た困弊せり。

第四十五章 交趾の叛服

安南 緬甸 暹羅

安南

明の成祖安南を滅ぼして、交趾布政司を置き、これを統轄せしが、國民明の政を悦ばず、常にその統治を脱せむと欲す。明の宣宗の時、黎利兵を擧げて反し、獨立して國を大越といふ(二〇九)。宣宗遂に利を封じて安南王となす。黎利の孫黎灝に至り、占城、老撾等を略し、國勢甚た盛なりしが、その死後内亂

起り、南北に分裂す。のち一時南北合一せしかども、忽にして大越・廣南の二部に分る(二二六)。これより二國相對立して、清時代に及べり。

緬甸は元の世祖に征服せられてより(第四十五章參照)、元・明に朝貢せしが、明の英宗の時、雲南の孟養部に侵略せらる。のち莽瑞體起り、附近を攻略し、國勢を回復す。子莽應裏に至り、明を侵ししが、神宗に破らる(三二四)。これより國勢大に衰へ、明の末に分裂して、阿瓦・白古・阿羅干の三國となる。

暹羅は元の末に、暹羅・暹羅二國の合したるものにして、一時明の太祖の封爵を受けたりしかども、爾來支那との關係甚た少し。明末日本人の移住するもの多く、山田長政の如きは、國王に登用せられ、國勢一時振ひしが、又忽にして衰へたり。

暹羅

第四十六章 明の末世

朋黨の争 明の滅亡

朋黨の争

明は外患頻りに至りて、大に苦むに際し、内憂又交、起れり。神宗の初め張居正政を執り、綱紀稍振ひしがども、その死後神宗政を怠り、顧憲成斥けられて郷に歸り、東林書院に學を講じ、時事を議す。志を得ざる徒、大にこれに附和す。朝にあるものは、憲成等を目して東林黨と稱し、痛くこれを斥く。

神宗崩じて光宗・熹宗相繼ぎて立つ。熹宗の時、東林黨一時勢を得たれども、非東林黨は宦官魏忠賢と結ぶに及びて、再び勢を得たり。忠賢權を專にして政令日に亂れ、内には流賊群をなし、外には滿州日に強大となりて、國を清と號し、漸次南侵せり。

明の滅亡

熹宗崩じ毅宗立つに及びて、政令益亂れ、朝廷又賦税を重くし、加ふるに陝西の地飢饉あり、流賊李自成陝西に起り、進みて北京を陥る。帝自經し、李自成帝位に即く(二三年)。さきに明將吳三桂、清を防ぎて屢敗れしが、こゝに至りて清に降り、その援に依りて李自成を伐ち、これを破る。

こののち明の遺族江南に據りて、屢恢復を圖りしが、みな清に滅ぼさる。明の遺臣鄭成功、一時勢を振ひしかども、亦幾はくならずして敗死す。その子孫臺灣に據りて、一時獨立せしものち清に降る(第五十一章 參照)。

第四十七章 元・明の學藝・宗教

儒學 文藝 宗教

儒學

元は學藝盛なりといふを得ず。明の太祖成祖等常に學事を

獎勵し、専ら程朱の學を重せり。英宗の時に王守仁(陽明)良知・良能の説を唱へて、姚江派の祖となる。世に王學或は陽明學と稱す。この學は宋の陸象山より出で、稍禪學に類す。王學と朱子學との異るところは、朱子は心を治むるの要は、行を謹むにありとし、王子はまづ直に心を治めむとするにあり。

明の初め宋濂・方孝孺等、文章を以て名あり。そののち文體流れて軟弱となりしが、孝宗・世宗の間に至り、李東陽・李夢陽等出で、古文辭を唱へ、詞章の學その盛を唐宋に比するに至る。詩は明の初めに、高啓(青邱)出で、有名なり。

元にては、佛教の一派喇嘛教盛に行はる。明にては、太祖以來歴代佛教盛なりしが、世宗道教を信奉せしより、佛教漸く衰ふ。基督教は元代より漸く支那に入りしが、明の初めに一時

宗教

文藝

これを禁ず。中葉以後亞・歐交通の開くるに従ひて、盛に行はるゝに至りしことは、後章にこれを説かむ(第四十八)章参照。

第四十八章 歐人の東漸

印度の形勢 葡西人の東畧 天主教の東流

明の中頃より、歐人の東漸するもの漸次多きを加へたり。而して印度は常にその衝に當りたるが故に、今印度の形勢を略述し、のち歐人東漸の概況を説かむ。

印度の形勢

印度は帖木兒の侵入以後、國勢常に振はざりしが、明の世宗の時、帖木兒の後裔、娑伯爾、印度の大半を略して、莫臥兒帝國を建つ(二一八)年。その孫、アクバル、全印度を平定して、國威大に張る。そののち國運漸次衰へ、遂に歐人の侵略を蒙れり(第四十五章第五十)章参照。

葡西人の東畧

蒙古一時大版圖を有して、東西交通の便を開きてより、支那・印度・日本等の事情の、歐州に知らるゝもの多く、加ふるに歐洲にては、遠洋航海の術大に開け、東洋に達する新航路を發見せむことに盡力せしかば、明の中頃より、歐人の東洋に來るもの多し。

東洋航海の先鞭を着けたるは、葡萄牙人なり。バスコ・ダ・ガマ、葡萄牙王の命を受けて、亞非利加の南端喜望峰を廻り、印度の「カルカッタ」に達し(一五二)年。更に「ゴア」を占領し(一五七)年。益々東進して支那の「阿瑪港」(澳門)を取り(一五八)年。これを根據地とし、更に日本にも來りて、貿易に従事せり。

葡人に次いで、西班牙人亦東洋に來り、比律賓群島を占領し、馬尼刺を建て(一五七)年。盛に東洋貿易に従事せり。

要するに葡人「ゴア」を占領してよりのち、凡百三十年間は、葡人常に東洋貿易の全權を有したりしかども、和蘭人來りて東洋貿易に従事するに及びて、全く葡西二國人の商權を奪へり。蘭・英・佛人等の東洋に來りて、競争を試みたる狀況は、次編に述ぶべし(第五十四章參照)。

天主教の東流

亞・歐兩洲の交通開けてより、基督教漸次東洋に傳來し、その新舊兩派の争起りてより、「ジエシュイ」派始めて印度に入り(二一六)、爾來印度・支那・日本等に熱心に布教せり。清朝に及びても、その徒なほ厚遇を受けたり。

第四十九章 元明時代の概論

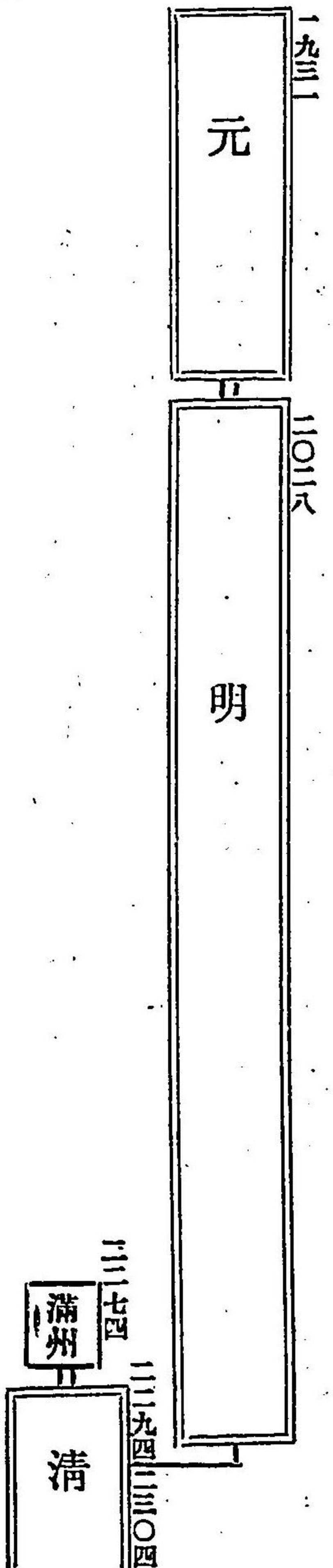
宋・金相争へる時に當り、蒙古族北方に起りて、二國を滅ぼし、

支那を一統して、國を元と稱す。元の支那を統治する間は、文化の見るべきもの少かりしかども、版圖甚だ廣くして、亞・歐兩洲に跨り、道路を開き、驛遞を設けて、交通を便利にせしは、實にその百世に誇示するところなり。

明、元の衰ふるに乗じて、これを漠北に逐ひて、支那を一統す。明は宋と同じく、内治は文事を重し、武略を卑み、外交は概ね和議・保守を主としたり。明末暴政相繼ぎ、加ふるに災害交、至るに及びて、盜賊蜂起し、遂に滅亡を招けり。

元一時大版圖を有してより、歐・亞の交通漸く開けしが、明の中頃より、歐洲にて航海術大に進歩するに及びて、歐人の東漸するもの次第に多く、のち歐洲列強が東洋に競争を試むる端は、實にこの時に發せり。

元・明の沿革略表



略年表

元—九七年間(一九三一—二〇二八)
 明—二七六年間(二〇二八—二三〇四)
 元ノ一統—一九三一年(龜山天皇文永八年北條時宗ノ時)
 元ノ滅亡(明ノ興起)—二〇二八年(後村上天皇正平二三年)
 朝鮮ノ建國—二〇五二年(後龜山天皇元中九年)
 莫臥兒帝國ノ興起—二一八八年(後奈良天皇享祿元年)
 滿洲ノ興起—二二七四年(後水尾天皇慶長一九年(德川秀忠ノ時))

明ノ滅亡—二三〇四年(後光明天皇正保元年(德川家光ノ時))

國都

元—燕京(直隸省順天府即チ北京)

明—金陵(江蘇省江寧府即チ南京)北京

近世史

第七編 清時代

第五十章 清の開國

滿州の興起 世祖の一統

滿州の興起
 清は愛親覺羅氏にして、通古斯族の滿州部に屬し、世々寧古塔の西南鄂多里に居り、明の英宗の頃、赫圖阿拉(今興京)に移る。努兒哈赤に至り、諸部を討平し、四隣を侵略し、國を滿州と號し、皇帝の位に即く(二二七四年)。これを太祖とす。太祖諸部の兵を率ゐて、遼東を侵し、瀋陽(奉天府)を陥れ、都をこの地に定む。こゝに於て滿州の領地、西は遼河より、東は日本海に至り、北は黑龍江より、南は朝鮮に接するに至れり。

太宗の侵略

太祖崩じ、太宗立ち、まづ朝鮮を征し、その和を許し、尋いで蒙古部を平定し、國を清と號す(二二九四年)。太宗再び朝鮮を伐ち、全くこれを降し、更に大軍を以て明の北邊を侵す。會帝崩じて世祖嗣ぐ。

世祖の南侵

世祖又大軍を出して、屢明を攻め、明の將吳三桂と戦ふ。李自成明を滅ぼし、吳三桂降を清に請ふに及びて、世祖これを許し、吳三桂と共に李自成を破り、直隸山西の地を略して、都を北京に遷す。

世祖の一統

時に明の王族遺臣、交江南に起りて恢復を圖る。世祖兵を出して南進し、終に諸王を滅ぼし、支那本部を一統せり。

第五十一章 聖祖の偉業

三藩の反 臺灣の平定 西北經略

三藩の反

明の降將吳三桂等、世祖一統の業を助けて功あり。世祖吳三桂を封じて平西王(雲南)とし、尚可喜を平南王(廣東)とし、耿繼茂を靖南王(福建)とす、これを三藩といふ。

聖祖(康熙帝)の時、尚可喜藩を撤して歸老せむことを請ふ。帝直にこれを許す。吳三桂自ら安せず、試に藩を撤せむことを請ふ。帝亦これを許す。三桂大に悔悟し、遂に兵を擧げて反し、雲南、貴州、四川、湖南の地を略す(三三三)。

耿繼茂の子精忠、尚可喜の子之信、相次いで起り、三桂に應ず。聖祖諸將を遣し、これを討つ。精忠、之信遂に降り、三桂も亦病死す。三桂の孫世璠は拒守せしかども、大敗して自殺す。ここに於て江南全く平ぐ(三三四)。

三藩の反する時、鄭成功の子鄭經、臺灣より三桂に應じて、屢

臺灣の平定

蒙古の平定

西藏の平定

福建、廣東等の沿岸を侵す。經死して子克塽立つ、三藩の亂平ぐに及びて、克塽降り、臺灣全く定まる(三三四)。

聖祖内亂を平け、尋いで露西亞と北方國境を議定し(第五十八章參照)。

更に進みて西北經略に従事す。

衛拉(明の後)の準噶爾部長噶爾丹、勢を伊犁地方に振ひ、衛拉を一統し、更に外蒙古の喀爾喀部を侵す。時に喀爾喀の地三汗分争して、外敵を拒ぐ能はず、走りて援を清に請ふ。聖祖親征して、大に噶爾丹を昭莫多に破る(三三五)。

噶爾丹敗れしかば、その姪策妄阿拉布坦、噶爾丹の虚に乗じて準噶爾を奪ひ、清に通ず。噶爾丹窮迫して自殺し、阿爾泰山以東の地みな清に歸す(三三五)。

策妄阿拉布坦、準噶爾を奪ひ、衛拉を併せて後、南方西藏の内

亂あるに乗じて、その長拉藏汗を殺す。聖祖西藏若し衛拉の領するところとならば、邊境の安からざるべきを慮り、兵を出して準噶爾の兵を破り、西藏を平定す(二年三八)。然れども聖祖未だ全く天山南北路の地を征服せずして崩す。

第五十二章 高宗の偉業

西北經路 西南經路

青海の平定 聖祖崩じて世宗(雍正)立つ。青海の和碩部亂をなしたが、世宗の軍に破られて、準噶爾に投ず。策妄阿拉布坦これを容れて、清に抗す。その子噶爾丹策零立つに及びて、喀爾喀部に侵入し、大敗して清に和を請ふ(五年三九)。世宗崩じ高宗(乾隆)立つに及びて、策零死し、準噶爾の地大に亂れ、一族阿睦爾撒納清に内應せしかば、高宗兵を遣して準

天山北路の平定

天山南路の平定

噶爾を討平す、尋いで阿睦爾撒納反くに及び、直にこれを破り、悉く天山北路を平定す(七年四一)。阿睦爾撒納の反する時、喀什噶爾の酋長等、これに應じて清に抗し、天山南路の地大に亂る。高宗乃ち兵を遣し、討ちてこれを定む(二年四二)。こゝに於て清は天山南北路を平定し、國威葱嶺以西に及びり。

西南夷の平定

清の西北地方を經路するに乗じて、西南雲貴の苗族清に服せざるものあり、高宗これを討平し、尋いで大小金川諸部を平定せり(五年三四)。

緬甸

内地全く定まり、西北一帯及び西南夷みな服属せしかば、清は更に緬甸、暹羅、安南諸國と關係を生ずるに至れり。緬甸は明の末三國に分裂してより、清の初めには白古部勢

を振ひしが、高宗の時雍籍牙なる者起りて國を一統し、緬甸王と稱す(三四年)。これより暹羅を滅ぼし、更に清に迫り、屢高宗の軍を破る。會、暹羅漸次強大となりて、南隣を窺ひしかば、緬甸遂に清と媾和す(九二年)。

暹羅

暹羅は清時代に至りて、國勢大に衰へ、高宗の時一旦緬甸に滅ぼされしが、その清と戦ふに乗じて、漢人鄭昭暹羅王と稱し、都を盤谷に定む(七二年)。鄭昭死してのち、フヤナヤクリ立ちて、清の封冊を受く。今の暹羅王家の祖なり。

安南

安南は明代以來、大越・廣南二國久しく對立せしが、清の高宗の時、阮文岳・阮文惠兄弟兵を起して、二國を一統す(六四年)。文惠屢、清と相争ひしが、遂にその封冊を受けたり(八四年)。

清の極盛

康熙・乾隆の間、内は制度確立し、文物興隆し、外は支那本部以

外の諸國漸次服属し、版圖頗る廣大となり、實に清朝極盛の時なり。

第五十三章 清の衰運

仁宗宣宗時代の内亂

教匪の亂

乾隆の末、白蓮教徒經呪を偽造し、災害を救治するを名として、四川・陝西・湖北の人民を誘惑して亂をなししが、直に討平せらる。仁宗立つに及び、その徒再び起り、勢甚た盛にして、湖北・河南・陝西・四川・甘肅地方大に亂る。朝廷諸將を遣し、前後七年を経て、漸くこれを平定せり(三四年)。

海賊の亂

時に海賊蔡牽、朱潰と共に臺灣・浙江・閩粵に出沒して、抄掠を恣にせしが、遂に官軍に討平せらる(八四年)。この亂前後六年に亘れり。

回部の亂

高宗回部(天山南路)を平定してのち、その地に守將を置きしが、宣宗の初め守將民心を失ひたりしかば、浩罕(コカチ)にありし喀什噶爾(カシュガル)の酋長の遺族張格爾(張格尔)來りて回部を侵し、諸部大に亂る。宣宗乃ち諸將を遣して、これを平定せり(二四八)。

以上の數亂は、その禍害みな内に止まりて、未だ國家の大患とならざりしかども、宣宗の時鴉片戦争起りて、一たび外國に屈從せしより、國威頓に衰へ、内憂外患頻りに起るに至れり。その清と歐洲列國との交渉は、順次章を逐ひてこれを述べし。

第五十四章 蘭・英・佛諸國の競争

蘭人の東略 英人の東略 佛人の東略

葡西二國人の東洋に來航するは、單に商業に従事するに止

まらずして、頻りに宗教の傳播、土地の侵略を事とせしかば、東洋諸國民の怨を買ひ、遂に東洋貿易の主權は、和蘭人の占むるところとなれり。

蘭人の東略

蘭人は葡人に後るゝこと百年にして、始めて東洋に來り(三五六)年明)尋いで東洋印度商會を設立し(三二六)年)盛に商業に従事し、到る處葡西二國人の商權を奪ひ、瓜哇の「パタヴ」に總督府を置き、滿刺加(マカッサラ)を取り、錫崙(シロン)より葡人を驅逐し、印度の葡領を奪ひ、遠く我が日本にも來る。我が國外人來朝の禁を出しし(二二九)年)滅亡(二二五)年前)後、惟り蘭人は貿易を許されしかば、爾來東洋貿易の全權を占めたり。

英人の東略

英人は蘭人に先たちて東洋に來り(二二九)年)尋いで東印度會社を設けて(二二六)年)東洋貿易の歩を進めしが、我が國にては

蘭人に支那にては葡人に妨げられて志を得ず。印度にては初めは蘭人に敗られしかども、マドラス(二二九年)、「ボンベイ」(二三二年)、「カルカッタ」(二三五年)を占領してより、全く蘭人との競争に勝ち、佛人と衝突するに至れり。

佛人の東略

佛人は少しく英人に後れて東洋に來り、東洋貿易を營みしが、「シヤンダルナガル」(二三三年)、「ボンヂシエリー」(二三五年)を得てより、盛に英人と競争するに至れり。要するに明末より清初に至る間、東洋に於ては蘭人最も榮えたりしが、永くその隆盛を保つ能はず、康熙年間に至りては、英佛の勢力次第に加はり、印度に於て兩國衝突するに至れり。

第五十五章 英領印度

莫臥兒帝國の末路 英・佛の競争
英領印度の確立 緬甸の滅亡

莫臥帝國の
衰運

莫臥兒帝國は「アタバル」の孫「アウラングゼブ」立ち、國勢を
盛なりしが、その死後（二三六七年）は、諸侯離叛し、西方の「マ
ラッタ」「入・アッガン」人等侵入し、國勢大に衰ふ。この紛亂に乗じ
て、歐人盛に印度の經略を圖り、中にも英・佛二國人は激しく
競争せり。

英・佛の競
争

「ボンデシリ」の總督「デュプレー」は、莫臥兒帝國の紛亂に乗じ
て、佛國の勢力を印度に樹立せむと欲し、土人と結びて「マド
ラス」を攻略し、頻りに勝を制して勢盛なりしが、東印度會社
の書記「クライブ」起り、佛軍を破るに及びて、英國の勢威頓に

加はれり。

「クライブ」は「シヤンダルナガル」を侵し、佛人に與せし「ベンガル」副王を破り、尋いで「プラシー」の戦に、大に佛人及び土人の連合軍を破る(二四一)。こゝに於て英人は佛人を驅逐し、要地を占めて英領印度の基礎を建てたり。

英人の全勝

「ヘスナングス」「クライブ」の後を享けて、印度總督となり、頻りに諸侯王を征服し、その領地を略取す。「ヘスナングス」は本國にて彈劾せられしかども、印度經略の功は實に大なり。「ヘスナングス」の後に「コルンナリス」「ウェズレー」等相次いで印度に臨み、益力をその經略に盡し、印度は全く英國の手に歸せり。印度は英國に征服せられしかども、土人往々英人の所爲を惡み、その緬甸を攻むるに乘じ、莫臥兒帝等を奉じて亂をな

莫臥帝國の滅亡

す(二五一)。英人これを鎮定し、莫臥兒帝を廢す(二五二)。反亂平定の後、東印度會社は統治の權を會社の手より女皇に移さむことを請ふ、女皇は國會の議決を経て、印度女皇の尊號を兼稱せり(二五三)。爾來英國は力を殖民の獎勵及び土民の鎮撫に盡し、又文化を輸入して益領土の繁榮を圖れり。緬甸は清の高宗の時國運隆盛なりしが(第五十二 章參照)、英國が印度の經略に従ふに當り、これと爭端を開き(二四八)、土地を侵略せらるゝこと甚しく、のち屢、恢復を圖りしかども、英人に滅ぼされ、英領印度の屬邦となれり(二五四)。

緬甸の滅亡

第五十六章 清・英の交渉

鴉片戰爭 南京條約

鴉片戰爭の原因

清の宣宗(道光 帝)の時、回部の亂鎮定して未だ幾ばくならざる

に鴉片戦争起れり。この戦は清英間通商條約締結の困難と、鴉片輸入の禁止との原因せり。

英國東印度會社は高宗及び仁宗の時に、使を清國に遣して、通商の利便を増さむことを請ひたれども、許されざりき。然れども英人印度に勢力を擴張するに従ひて、聖祖・世宗の頃より、盛に鴉片を印度より支那に輸入し、大に民生に害を與へしかば、高宗以後鴉片の輸入を嚴禁したれどもその功なく、宣宗の時に至りて輸入益増加せり。宣宗仍りて林則徐を兩廣總督として、便宜事を處理せしむ。則徐乃廣東に赴き、英國の商館及び船中にある鴉片を燒棄し、嚴に輸入を禁ず。(二九)然るに英人なほ密に鴉片を輸入せしかば、林則徐斷然通商を禁せり。

鴉片戦争

こゝに於て英國は軍艦を派して、通商の復舊を迫る。林則徐これを許さざりしかば、大舉して舟山島を占領し、寧波を圍み、大に清軍を破る。英將別に北方に赴き、和を清廷に議す。宣宗乃ち使を廣東に遣し、英人と會せしめしかど、和成らず。英軍又廣東を陥れ、廈門・定海・鎮江等を攻略し、南京に迫る。宣宗大に恐れ、使節を遣し、南京に會して條約を結び、償金二千一百萬兩を出し、香港を割讓し、上海・寧波・福州・廈門・廣東の五港を開きて媾和す。(二五〇)

南京條約

戦争の結果

仁宗以來清國漸く衰へしかど、未だ外國に屈從せざりしが、鴉片戦争に敗れてこゝに始めて屈辱を蒙れり。清國輓近五十餘年間、常に外國との交渉に讓歩を事とする端は、實にこの時に發せり。

第五十七章 長髮賊の亂及び英佛の侵寇

長髮賊の亂 英佛の北清進撃 北京條約

長髮賊の蜂起

鴉片戦争の後、清の國威の衰へたると、兩廣地方飢饉の爲に盜賊蜂起して不穩なるを機とし、宣宗の末年洪秀全、天主教を奉じて頑民を誘ひ、兵を廣西に起す(二五〇)。宣宗崩じ文宗(咸豐)立つに及び、賊勢益強く、進みて湖南に入り、長沙を攻め、洞庭に出で、岳州を取り、楊子江を下りて武昌、漢陽以下悉く沿江の要地を略し、遂に南京を取る。秀全自ら南京に都し(三五一)、別に兵を遣して北上せしむ。朝廷賊勢甚た盛にして、官軍連りに敗るるを以て、天下に勤王の軍を募る。曾國藩起りて、まづ湖南を復し、頻りに賊を破る。然れども賊軍少しも衰へず、その害安徽、河南、山西、直隸に

外人の援軍

に及び、清廷の英佛と兵を交ふるに乘じ、賊勢益盛なり。羅澤南、曾國藩、左宗棠、李鴻章等國藩の薦めによりて起り、屢賊を破る。

英佛進撃の原因

文宗崩し穆宗(同治)立つ、賊上海に迫るに及びて、英、米、佛の兵官軍を援けて賊を防ぐ。米の華爾特、英の戈登最も功あり。これより官軍の勢頓に加はり、國藩大舉して南京に迫る。城中食盡き、秀全遂に自殺し、亂始めて平ぐ(二五二)。この亂十五年に亘り、賊の侵略するところ十六省に及び。

清内亂に苦しむに際し、外患又起る。鴉片戦争の結果、清は南京條約を結びしかども、その條件を履行せず、屢外人に敵意を表す。長髮賊の亂起るに及びて、廣東の官吏擅に英船「アロー」號を搜索し、清人を捕ふ(二五一)。香港領事「パークス」怒り

天津條約

てその不當を責む。會佛國宣教師廣西に殺さる。こゝに於て英佛聯合して廣東を陥れ、更に進みて天津に迫る。清廷長髮賊の亂に困む際なりしかば、和を請ひて天津假條約を結ぶ。
(二五年一)

北京條約

然るに翌年英佛公使天津條約批准交換の爲に、北京に赴かんとせしに、清これを拒み、却りて白河々口にて英佛公使を砲撃す。英佛公使大に怒り、直に太沽(天津の北)を陥れ、天津を取り、遂に北京に迫る。時に文宗逃れて熱河(直隸省)に幸し、皇弟恭親王北京に在りて和を請ひ、露國公使又仲裁を試む。(第五十八章參照)こゝに於て清廷天津條約の條件、即ち南京條約の履行、揚子江自由航行、基督教保護、及び牛莊(遼寧省)、登州、潮州、臺灣、瓊州、九江、漢口等の開放、償金千八百萬兩の支出(前は天津條約に)を約して、

和議を結ぶ(二年五三)これを北京條約といふ。

第五十八章 露人の東略

露人の東略 露清の關係

露西亞は宜萬三世の時、欽察汗國の統御を離れて獨立す(二四〇年明)爾來哥薩克兵續々西北利亞に侵入し、トムスク、エニセイスク、クライスノヤルスク、ヤークツク等を建て、明の末には「オコツク海」「カムナヤッカ」に達せり。

清の初めに哥薩克兵、バイカル湖及び黑龍江地方を略し、アルバジン(雅克薩)イルクーツク、尼布楚等の堡塞を築き、清の滿州兵と衝突するに至れり。これより兩國の兵屢戦ひ、互に勝敗ありしが、聖祖内亂を定めて南方事無く、専ら北方露軍に當るに及びて、清軍遂に「アルバジン」城を陥る(二三四五年)彼得大

露人の西北
利亞經畧

尼布楚條約

帝露に君たるに及びて、使を遣し、清露國境を定めむとす、清廷乃ち使を派し、尼布楚に會せしめ、條約を結び、外興安嶺以南、アルグン河以東の地を悉く清領と定む(二三四)。

愛琿條約

尼布楚條約により、清は一時露人の侵略を免れしかども、以後西南經略に従ひて、北方の警備を怠るに當り、露人頻りに黒龍江地方を侵し、「ニコライスク」を建て、清の長髮賊の亂及び英佛の侵寇に苦むに乗じて、境界問題を提出す、清己むを得ず、愛琿條約を結び、黒龍江以北の地を露國に割讓せり(二五二)。

尋いで清が英佛二國と北京條約を結ぶに當り、露國は仲裁の勞を取りし報酬として、更に烏蘇里江以東の地を得たり(二五二)。露國の軍艦が我が對馬に據り、英國軍艦の勸告によ

りて退去したるも、實にこの年なり、露國は更にこの地に浦塩斯德を建て(二五三年)、又我が國より千島との交換を名として樺太を得たり(二五三年)。爾來現今に至るまで、露の東亞侵略は一日も止むことなし。

第五十九章 露人の南略

露人の中亞侵略 清露の交渉

露人の南侵

露人は頻りに東亞を經略すると共に、中亞に向ひても亦南侵の策を講せり、彼得大帝の時、中亞には基華布哈拉浩罕の三汗國ありしが、帝は裏海及び西比利亞の兩方面より、侵略を試みしかども志を得ざりき、後吉利吉思族を征服してより、アラル海西比利亞方面より兵を進め、三汗國の紛争するに乗じて、まづ浩罕汗國に侵入し、次に布哈拉汗國を攻め、そ

の地を割取して保護國とし(八年五二)基華汗國より阿母河右岸の地を割取して屬國とし(三年五三)終に浩罕汗國を滅ぼす(六年五三)此の如く露人南侵して清國と境を接するに至り、會伊犁地方の内亂に乗じ、その地を占領して清國と葛藤を生ぜり。

回部の亂

清の高宗の時、回部の亂を平定して、その地一時平穩なりしが、長髮賊の亂に乗じ、回教徒東干族兵を甘肅の地に擧げ、四隣の回教徒これに應じ、伊犁地方大に亂る(二年五三)阿古柏喀什噶爾に起りて、東干族を征服し、英露と通じて清に抗す。清將左宗棠賊を攻めて、屢これを破る。今帝(光緒)の時に至りて、遂にこれを平定せり(八年五三)。

伊犁事件

伊犁の亂るゝ時、その蕃民露商を害す。時に露國は頻りに南

侵を事とせし際なりしかば、邊境を守るを名として伊犁を占領す。左宗棠亂を平定するに及びて、清廷露に伊犁の返還を求め、崇厚を遣し、リワヂヤ(露帝の離宮)の假條約を結ぶ(五年三八)然るに條約中清より五百萬留を償ひ、テケス河(伊犁河)上流の沃土を露に讓與するの個條ありしかば、大に物議を起し、條約を廢棄して清露將に開戦せむとす。清廷更に曾紀澤(國子)を露國に派し、談判の末各讓歩し、清は露に九百萬留を償ひ、テケス河岸の地に代ふるに、コルゴース河以西の地を以てして和を結ぶ(明治十四年)。

第六十章 英露の衝突

波斯 阿富汗の状況 英露の衝突

波斯

帖木兒の死後その領地瓦解し、波斯は種々の變遷を経たり

しが、清の高宗の初め「ナザル」波斯王となり（二三九）大に威を四方に張れり。「ナザル」の死後は内亂相繼ぎ、又屢露國の侵略を蒙れり。今の波斯王家の始祖「アガムハメド」立ちて、波斯を一統するに及び（二四五）英の後援を得て露國の南侵を防ぎしが、後遂に露國に破られ、「デオデア」を割讓して和を結ぶ（二八八）これより波斯は全く露の同盟國となれり。

阿富汗

阿富汗は常に波斯と盛衰を共にせしが、「ナザル」の死後「ドストムハメド」可不里に起りて、王位を奪ひ（二四八）國を一統せり。以後阿富汗は常に英露の間に介在して、その紛争の衝に當る。

英露の衝突

「ドストムハメド」は、廢王の印度に逃れて英人の保護を受くるを見て、英人を怨む。露國この機に乗じて、「ドストムハメド」

と結び、阿富汗人をして英人に抗せしむ。英國の印度總督兵を進めて可不里を陥れ、廢王を立て、阿富汗王とす。然るに國人服せず、大に英軍を破る。英は露の益、南侵するを憂ひて、遂に阿富汗國と和を媾じ（二五〇）尋いで防禦同盟を結ぶ（二五九）。

阿富汗事件

後阿富汗露國を恃みて、英國に抗せしかば、英國はその地を割取して和を結ぶ（二五三）然るに當時露國は益、南侵し（第五章參）遂に「メルヴ」を併呑し（二五四）なほ進みて阿富汗の西北を略し、「ヘラット」に迫るに及び、露國と阿富汗との境界に關して、英露の間に久しく議論決せず、戰將に開けむとして、英は巨文島を占領せしが（二五四）談判二年の後、協議漸く成り、英は巨文島を撤去せり（二五四）露國が清英兩國に對して、英國

にして巨文島を撤去すれば、露國は將來何等の事情あるも、朝鮮の領土を占領せざるべしとの、最も明確なる證言をなせしは、實にこの時なり。

阿富汗はその西北境界確定せしかども、東北境界は判然ならざりしかば、露國は兵を「パミール」高原に派遣せり。こゝに於て英は再び露に抗議し、談判數年の後、漸く局を結び、英國は「ナトラル」地方を占領せり(明治廿五年)。

第六十一章 安南・暹羅及び清佛の交渉

安南暹羅の盛衰 清佛の交渉 英佛の経略

阮氏越南・大越を併せ、清の封冊を受けて東京王となる時(第五十二章)、越南の王族阮福映逃れて暹羅に入り、柴棍(柴棍)に據る。東京王死して内亂起るに及び、阮福映遂に安南を一統す(六三三四)。

「パミール」事件

越南の一統

佛・越南の
交渉

（年）清の仁宗これを封じて越南王とす、乃ち今の王室の祖なり。

初め越南王、化南島の讓與を約して佛人に援を得たりしが、一統の業成りて後、その約を履行せず、却りて佛人を忌み、基督徒教を虐待す、佛人これを責め、兵を遣して安南を伐ち、柴棍（コン）を占領す、越南王遂に南方交趾支那を割讓して和を講ず（三五三）翌年眞獵も亦佛國の保護國となる。

佛國の越南
征伐

佛國は一旦越南王と和せしかども、その北部鑛山所在地に注目し、會、越南人の佛人を害せしを機として、兵を派遣し、遂に海内（イ）近傍の地を占領す、時に長髮賊の殘將劉永福、越南王を助け、屢、佛人と戦ひてこれを破る、佛將「クールペー」來るに及びて、佛軍大に勢を得、東京順化を陥れしかば、越南王力屈

し、遂に和を請ふ。佛國即ち越南を保護國とし、東京を割取して局を結ぶ(三五四)。

佛國東京を割取し、越南を保護國となすに及びて、清廷は越南を外藩なりとし、佛國駐在公使曾紀澤をして、佛國に談判せしむ。佛國の首相「フーリ」固く執りて動かす、清已むなくその意に従ふ。

清佛戦争

こゝに於て佛軍約に従ひ、諒山(紅河の上流)を占領せむとせしに、清の守兵突然これを砲撃せしかば、佛國は償金を清國に要求す。然るに清國應せず、平和爰に破れ、佛將「ネグリエ」陸軍を率ゐて鎮南に侵入し、「クールベ」海軍を率ゐて福州を攻め、福建艦隊を撃沈し、又臺灣を攻めて、その諸港を封鎖せり、會佛國內閣更迭して、輿論平和に傾き、又「クールベ」病死せ

しかば、兩國和を天津に結び、佛國は償金の要求を中止し、清國は佛國が越南を保護國とし、東京を割取するを是認せり(二五四)。

暹羅の進運

暹羅は清高宗の時に今の王朝起りてより(第五十二章參照)歴代明主多く出でて、國家の進歩を圖れり。然れども暹羅は英佛領地の間に介在したれば、遂に二國紛争の地たるを免るる能はず。

英佛の交渉

清佛の戦終局し(二五四)佛人は全く東京を領し、越南を保護國とせしより、暹羅に迫りて「メコン」河以東の地を得むことを求む。暹羅已むを得ず、その地を與ふ(三二五)然るに英國さきに緬甸を併呑し(二五四)なほ「メコン」河上流の地を得むとするに意あり、故に佛國の「メコン」河以東の地を占領するに

當りて異議を挟み、兩國將に衝突せむとせしが、後遂に二國協議し、暹羅の抗議を排して、恣に暹羅の領地を「メナン」河流域に限り、「メコン」河上流に中立地を立て、局を結ぶ（二年五明五治廿七年）。

第六十二章 日・清・韓の關係

朝鮮と歐洲諸國 日清韓の關係

清の太宗二たび朝鮮を征し、爾來朝鮮は清に朝貢せしが、清の國運漸く衰へ、歐人東洋に來航すること頻繁となりしより、佛人朝鮮に來りて基督教を傳へ、盛に布教に盡力す。朝鮮今王李熙立ち（二年五二）生父大院君李昰應政を攝し、大に歐人の侵略主義を惡み、佛國の基督教徒を殺す。よりて佛の軍艦江華島を砲撃せしが、却りて敗れ退く（六年五二）尋いで米國商

朝鮮と歐洲諸國

日韓の關係

船大同江に來りて通商を求む、朝鮮人米人を襲殺して、その船を焼きしかば、米艦江華島の砲臺を砲撃す、然れども成功全からずして去る（八年五二）
朝鮮は豊臣秀吉の征韓以來、大に我が國を仇視せしが、徳川氏の時に至り好を修め、交通絶えざりき。然るに大院君政を執るに及び、一時我が國と修好を絶つ。後佛・米の軍艦を撃破して、意氣頗る傲り、屢我が國の好を修めむとするを斥け、且無禮の舉動を加ふること多し。然れども我が國はなほ忍びて朝鮮を導かむと欲し、新に通商を開かむことを望めども、頑として應せず、遂に故なく我が軍艦を江華島に砲撃す、我が國黒田清隆を遣し、その罪を問はしむ、朝鮮罪を謝して和を請ふ、のちその請を許し、通商港を開かしめ、朝鮮を獨立國

と認む(明治八年)尋いで米英獨露佛の五國も亦我が國に倣ひ、朝鮮と條約を結びて、その獨立を認む。
 朝鮮王政を親らし、王后閔氏の一族權を專にするに及びて、大院君不平に堪へず、再び鎖國を行はむとし、我が公使館を燒く。我が國井上馨を派して罪を問ひ、償金を出さしめ、兵を京城に駐在せしむ(二年五)清國も亦兵を派して京城に置けり。

日清韓の關係

この後朝鮮にては、獨立黨と事大黨との争甚しく、その極獨立黨事を發して事大黨を撃ち、我が日本公使館に頼る。清兵は事大黨を助けて、我が日本公使館を燒く(明治十四年)仍りて我が國は井上馨を派し、償金を収め、尋いで伊藤博文を清國に派し、李鴻章と天津に會して條約を結び、朝鮮に駐在せ

天津條約

る兩國の兵を撤去し、將來出兵の必要ある時は、互に相通知すべきことを定む(二年五)。

第六十三章 日清戦争

戦争以前日清の關係 日清戦争

日清衝突の遠因

我が國さきに歐洲諸國と交通を絶ちし後も、清國と和蘭とは通商を許せり。清穆宗の末、日清間に假條約を結びしが(二年五)。幾ばくもなくして臺灣征伐の事により、兩國隙を生ぜむとせしかども、駐清英國公使「ウード」氏の調停により、清國より償金を得て事止む(二年五)。
 尋いで我が國琉球王を廢し、沖繩縣を置くに當り、清國異議を唱へしかども、固より我には正當の理由あり、又米國前大統領「グラント」兩國の間を周旋せしかば、琉球の我が版圖た

ることは確定せり(二五三九年、日清の衝突の第二因)
 臺灣・琉球の事により、日清兩國互に悪感情を懷きしが、その影響は延きて朝鮮に及び、獨立事大兩黨の争となり、遂に清兵我が公使館を焼くに至り、兩國益敵視せり(第六十二章參照、日清衝突の第三因)
(三)天津條約によりて、日清兩國朝鮮に對して同一の權利を有すること確定し、日清の間一時平和に歸したりしが、爾來清國の勢力全く朝鮮を壓して、朝鮮は清の屬國たるの實あり、故に朝鮮の獨立を主張する我が國と、これを屬國視する清國とは、到底衝突をは免るゝこと能はず(日清衝突の第四因)
 後朝鮮に東學黨の亂起るに及び(明治廿五年)、日清兩國各兵を朝鮮に派し、我が國は協力して朝鮮の内政を改良せむことを清國に勧誘せしかども、清國はこれを拒み、且公然朝鮮

日清衝突の近因

は清の屬國なりと主張し、我が國の撤兵を請求す。こゝに於て我が國は清國が天津條約を無視せるを怒り、朝鮮の獨立及び東洋平和の爲に、戦を開くに至れり(日清衝突の近因)。

日清戦争

日清戦争は豊島沖の海戦に始まり、牙山・平壤・金州・旅順・黄海・威海衛・牛莊等の大戦に、我が國大勝を得、清國力盡き、李鴻章を我が國に來らしむ、伊藤博文・陸奥宗光・李鴻章と馬關に會し、清は朝鮮の獨立を確認し、償金二億兩を我が國に支辨し、遼東半島・臺灣・澎湖列島を割讓し、沙市・重慶・蘇州・杭州を開くことを約して和を結ぶ(明治廿五年)。

三國の干渉

露國は常に英國の爲に中亞南侵の策を妨げられ、専ら東亞侵略を勉め、西比利亞鐵道敷設の議を決定してより(二年五月廿一日)、一日も怠ることなく、又歐州外交上の關係より、露國は

ることは確定せり(二五三年、日清の衝突の第二因)臺灣・琉球の事により、日清兩國互に悪感情を懷きしが、その影響は延きて朝鮮に及び、獨立事大兩黨の争となり、遂に清兵我が公使館を焼くに至り、兩國益敵視せり(第六十二章參照、日清衝突の第三因)天津條約によりて、日清兩國朝鮮に對して同一の權利を有すること確定し、日清の間一時平和に歸したりしが、爾來清國の勢力全く朝鮮を壓して、朝鮮は清の屬國たるの實あり、故に朝鮮の獨立を主張する我が國と、これを屬國視する清國とは、到底衝突をば免るゝこと能はず(日清衝突の第四因)後朝鮮に東學黨の亂起るに及び(明治廿七年)日清兩國各兵を朝鮮に派し、我が國は協力して朝鮮の内政を改良せむことを清國に勧誘せしかども、清國はこれを拒み、且公然朝鮮

日清衝突の近因

日清戦争

三國の干渉

は清の屬國なりと主張し、我が國の撤兵を請求す。こゝに於て我が國は清國が天津條約を無視せるを怒り、朝鮮の獨立及び東洋平和の爲に、戦を開くに至れり(日清衝突の近因)日清戦争は豊島沖の海戦に始まり、牙山・平壤・金州・旅順・黄海・威海衛・牛莊等の大戦に、我が國大勝を得、清國力盡き、李鴻章を我が國に來らしむ、伊藤博文陸奥宗光、李鴻章と馬關に會し、清は朝鮮の獨立を確認し、償金二億兩を我が國に支辨し、遼東半島・臺灣・澎湖列島を割讓し、沙市・重慶・蘇州・杭州を開くことを約して和を結ぶ(明治廿五年)露國は常に英國の爲に中亞南侵の策を妨げられ、専ら東亞侵略を勉め、西比利亞鐵道敷設の議を決定してより(二年、明治廿三年)一日も怠ることなく、又歐州外交上の關係より、露國は

佛國と同盟し來りしが、會日清戦争の結果我が國が遼東半島を割取するに及びて、露佛獨の三國相謀りて、我が國に其還附を要求す、我が國遂に三國の忠告を容れ三千萬兩の償金を得て、遼東半島を清國に還附せり(二五五)。

第六十四章 日清戦争後の東洋

戦後の朝鮮 戦後の支那

日清戦争は我が國の優勢なると、支那の衰弱せるとの實情を、世界に知らしむる機会となりしかば、これより歐洲列國の東亞に於ける經略は、益激烈となれり。

戦後の朝鮮

朝鮮にては、戦後日本は一時勢威を振ひしかども、その急激の改革を行はむとせしことは、却りて朝鮮國民の感情を害し、王后閔氏の慘死以來は、日本の勢力頓に減せり、爾來日露

戦後の歐洲列強の支那經略

兩國互に朝鮮を誘導し、各自國勢力の扶植を勉め、朝鮮の外交頻繁を極めしが、日露協商成立して、一時小康を得たり。然れども、現今に至るまで、黨争變亂相續き、國運の進歩少しも見るに足るものなし。

露國は支那の戦後財政困難なるを見て、佛國をして支那の外債に應せしめ、自らその内治財政に干渉し、又支那東部鐵道敷設の特許を得、滿州を貫きて西比利亞鐵道をして南方海口に出づる道を得たり。佛國は東京境上に於て、英國は緬甸方面に於て、清國をして讓歩するところあらしむ。

獨國は二五五七年の末、その國の宣教師が殺されたるの故を以て、膠州灣を占領し、翌年に至り清國に迫りて、遂に九十九年間膠州灣借入の約を結べり。仍りて英國は直に清國と、

揚子江沿岸の地は何れの國にも貸與割讓せざるべきの約を結べり。同時に露國は二十五年間旅順口・大連灣の借入及び滿州鐵道を延長して二港に連絡する支線を敷設する權を得、佛國は廣州灣の借入、東京境上の三省不割讓の權を得たり。尋いで英國は威海衛及び香港對岸の地の借入の權を得、日本は福建省不割讓の約を結べり。

支那の國情
翻りて清國內部の國情を觀るに、少しも積弊を改むることなく、國事日に非なり。こゝに於て康有爲等書を朝廷に上りて、改革の意見を述べ、今帝これを採用せむとせしかども、政事の實權を握れる西太后及びその一派の徒、全くこの急激の改革を斥け、遂に皇帝は幽閉せられ、康有爲の徒は或は殺され、或は外國に逃走せり。(明治三十八年)爾來清の國運は益衰

へ、歐洲列國の跋扈は日に盛なり。

北米合衆國は建國以來世界の政局に容喙すること少かりしが、東亞の近狀に見るところあり、二五五九年(明治卅)九月より二五六〇年の三月に至る間に、英・佛・獨・露伊及び日本に向ひて、列國共力して支那を開放せむことの議を提出して、皆同意を得たり。然るに未だ幾ばくならずして、義和團暴徒の亂起れり。この亂は遠くは、今帝即位の時に於ける繼嗣問題、近くは歐洲列國の侵略要請を憤れる排外精神、及び宗教問題等に原因するものゝ如し、かくて東亞の天地は實に紛亂を極めて、底止するところなき有様なり。

第六十五章 清の制度・學術・宗教

制度 學術 宗教

義和團の亂

清滿州より起り、明に代り、その固有の風俗を脱せざりしかども、制度は多く明代の遺範を採用して整頓し、學術は興隆して頗る觀るに足る。

官制

中央政府には内閣・軍機處・總理衙門・理藩院・都察院等あり、内閣には大學士(大)及び協辦ありて、政務を總攬し、その下に吏・戶・禮・兵・工・刑の六部ありて、内政を分掌す。軍機處は軍事を議し、總理衙門は外交を掌り、理藩院は外藩の政を統べ、都察院は官吏を監察す。

地方政府は概ね二省毎に總督あり、その下に巡撫・提督ありて、文武の政を掌り、巡撫の下に布政司(財政を掌る)・按察使(刑獄を掌る)あり。又知府・知州・知縣ありて、各民政を掌る。

兵制

兵制は陸軍には八旗・綠旗・勇兵あり、海軍には北洋・南洋・福建

學術・詩文

廣東の四艦隊及び長江水師あり、北洋艦隊最強盛なりしが、日清戰爭の時殆ど全滅して、今は有名無實の有様となれり。學術は宋・明の性理學衰へ、漢・唐の學派を維へ、事實を考証して實用を求むるの學起れり。この考証學は顧炎武その端を發し、閻若璩・毛奇齡等の大儒これを大成す。文章・詩賦にも有名なる大家少からず。康熙・乾隆の間は學術最も盛なりしかば、著述甚た多く、中にも佩文韻府・淵鑑類函・康熙字典・大清會典・大清一統志・十八省通志・四庫全書提要・圖書集成等は、勅撰にかかる大著なり。爾來諸種の好著の出づるもの亦少からず。佛教は清朝に至りて大に衰へたれども、基督教・道教・喇嘛教・回教等と共に、所在に行はる。基督教は清初はなほ政府の保護を受けしかど、世宗これを嚴禁してより、一時大ニ衰へた

宗教

り。然るに近時又漸く行はるゝに至り、教徒と他の士民と往々衝突することあり。

第六十六章 清時代の概論

内憂外患交起りて明の國勢大に衰へたるに乗じ、滿州族東北より興りて國を清と號し、明を滅ぼして支那本部を一統す。

清は大に明と政略を異にし、民俗を變じ、文武兩道を尙びて、宋以後文弱の積弊を正す。支那本部を一統して後、更に進みて四方を征服し、その版圖の廣大なること、支那歷代中元を除きて、他にこれに及ぶものなし。然れども歐人の東略甚しく、國際の交渉頻繁なるに従ひて、外患續發し、加ふるに内亂

亦起り、國勢漸次衰運に向へり。

近時世界交通の便日に開け、東西兩洋の關係密接するに至り、歐洲列強清の政變頻りに起りて、民心の動搖するに乗じ、各暴慾を逞しくせむとす。實に東洋の風雲は切迫して豫測すべからざるなり。

清の沿革略表

二二九四 現今

清

略年表

清ノ改號—二二九四年(明正天皇寛永一一年徳川家光ノ時)

清ノ一統明ノ遺族ノ全滅—二三二二年(後西院天皇寛文二年徳川家)

綱ノ時

英國女皇印度皇帝ノ位ニ即ク十二五三七年明治十年

國都

清一北京

新編 東洋史要 畢

明治三十四年二月十九日印刷
明治三十四年二月廿二日發行

新編 東洋史要

定價金六拾錢

野村 浩

本多 辰次郎

石田 忠兵衛

東京市京橋區弓町廿三番地

橘 磯吉

東京市京橋區弓町廿四番地

三協 合資會社

大阪市東區安土町四丁目

積善館 本店

福岡市博多中嶋町

積善館 支店

廣島市鹽屋町

積善館 支店



不許
複製

著作者

著作者

發行者

印刷者

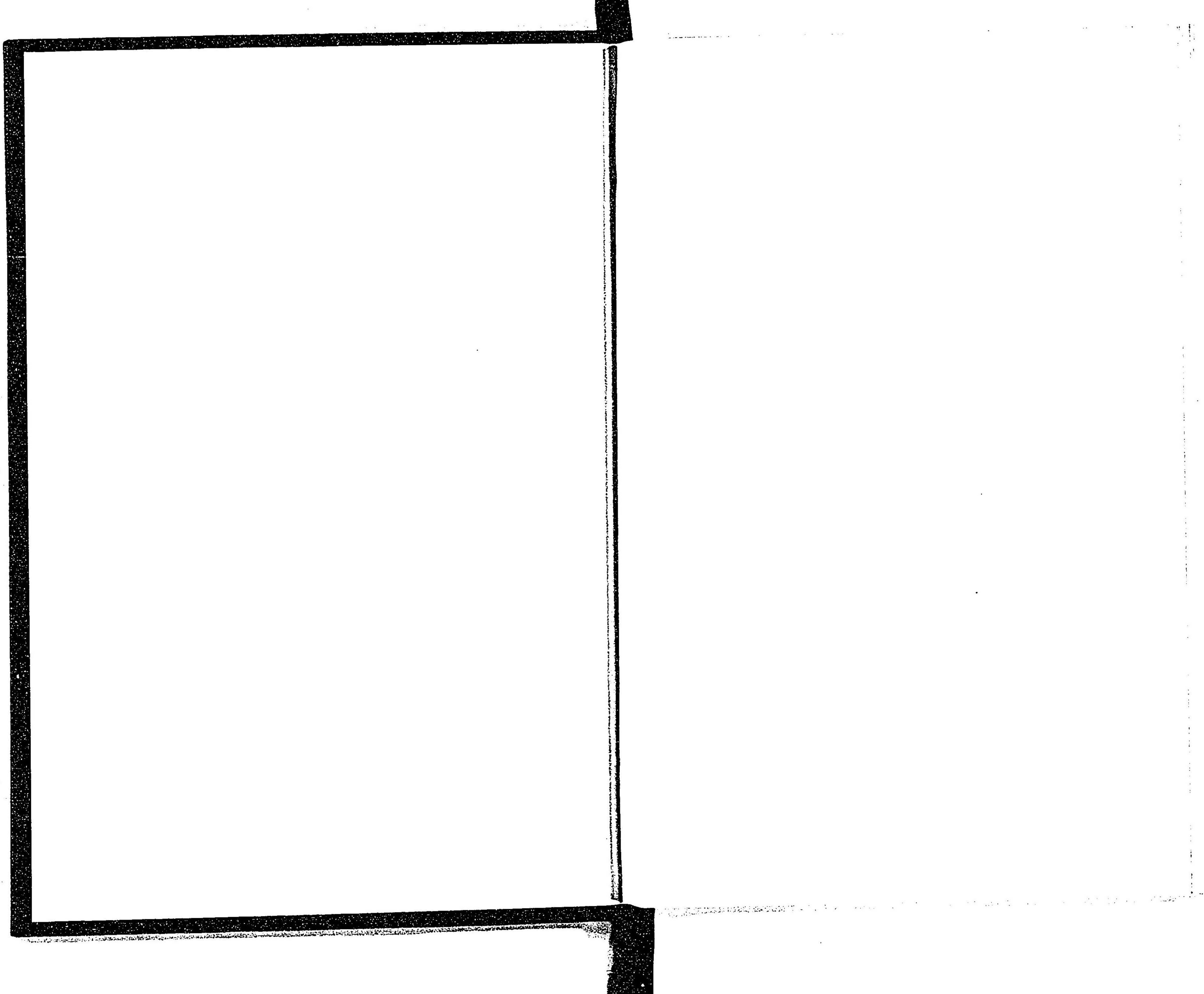
印刷所

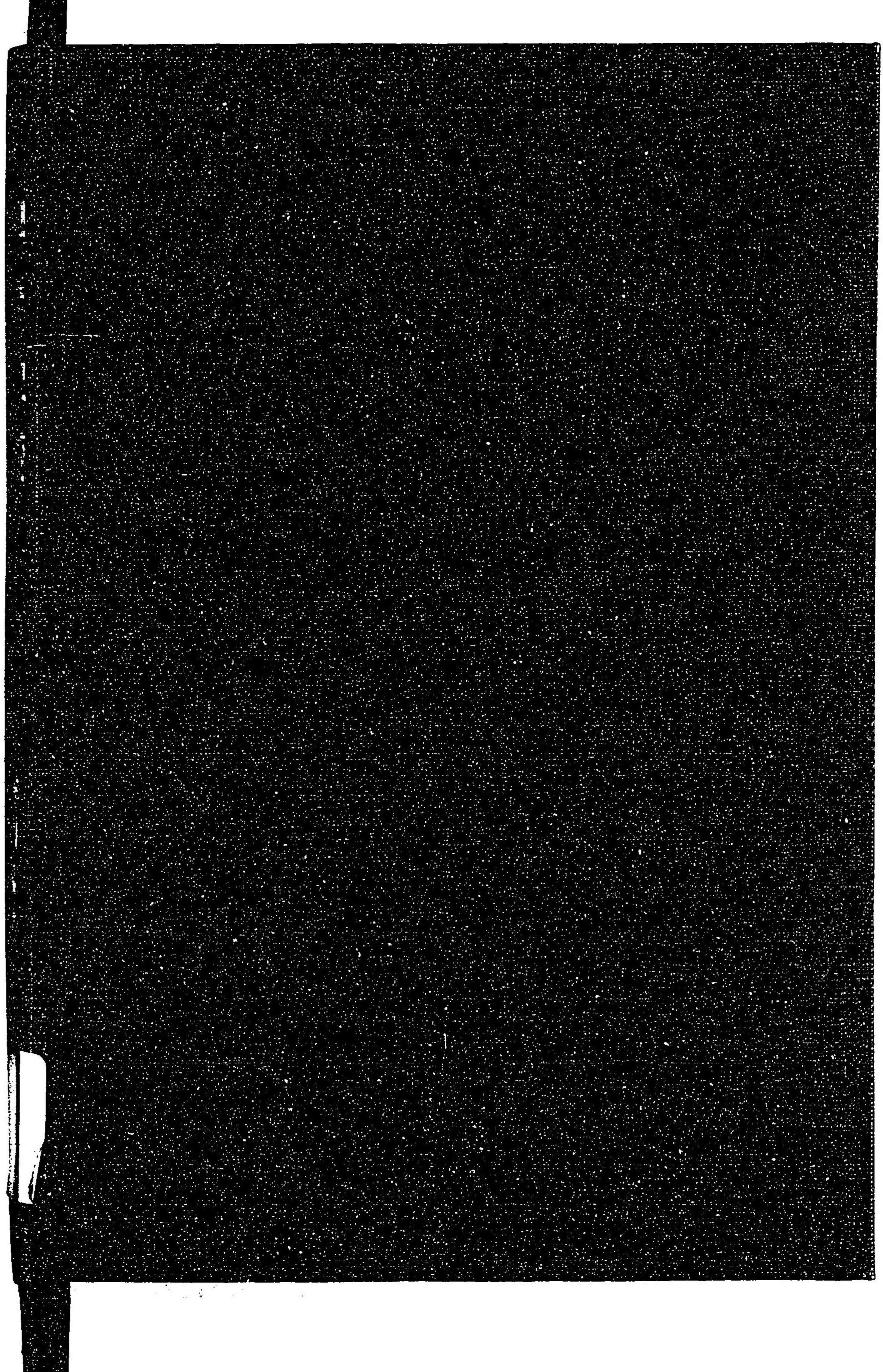
發賣所

發賣所

發賣所

8075





90
61

003259-000-2

90-61

新編東洋史要

野村 浩一、本多 辰次郎/著

M34

ACC-1554

